IS~一夏の叛抗～

終那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～一夏の叛抗～

【Ｎコード】
Ｎ８６２９Ｙ

【作者名】
終那

【あらすじ】
一夏改変モノ。色々、突っ込んでいくうちにえらい事になってしまったもの。これぞ、自重？ナニソレ、オイシイノ？です。
注意！
改変なんて邪道だ！や、○○なんざ、知るかボケェ！の方は、プロトタイプネクストにガチタンで討伐しに逝って下さい。

プロローグ（前書き）

初見となる私は、終那です。やってしまったが、後悔はない。極力、失踪しないように頑張ります。
プロローグです。短いです。駄文です。こんなんで、よろしければ読んでいって下さい。

プロローグ

これは、とある平行世界の物語。イレギュラーとなってしまった主人公は一体、どのような答えを導き出すのだろうか。それは、一体、どれほどの範囲に及ぶのか、どれだけのモノを犠牲にしていくのか。見当が付かない。

しかし、人である以上、何かの代償無しに何かを得ることはできない。それが世界共通の理ならば、主人公は何を対価に何を得るのだろうか。

電脳虚数空間の奥底で、数多の因果律を管理する自我は、ただただ、見続ける。様々なイレギュラー要素の入り混じった、平行世界の行く末を。

ＧＥＴ　ＲＥＡＤＹ？

プロローグ（後書き）

後書きと名ばかりの、懺悔部屋。
いつも、英語の使わなくなったノートに書いていた短編小説なのに、長編になったという罠。なんか、急にガクブルが、と・ま・ら・な・い。
あぁ、目の前に月輪が見えるのは、気のせいか。神は言っている。
ガチタンで戦え、と。
ガチタンでやったら、うp主の技量じゃ瞬殺ですな。ノーマルで、ギリッギリでしたから。
と言う訳で、これから月輪を相手にガチタンのハードで、キャッキャウフフしてきます。それでは、ここらで失礼させていただきます。

人物設定集１（前書き）

前のやつの修正版。１２月３日修正。

人物設定集１

本小説の、設定です。

・織斑一夏

この小説の主人公にして、最大の改変処置をした人物。作者自身、どうしてこうなった、と思う今日この頃。

誘拐事件の折、ハッター軍曹（後述）に助けられ遅れて救出に来た千冬と決別する。それに伴い、「織斑」から「霞」に苗字を変える。（番外編で書きます。）その後、ハッター軍曹の下でＭＡＲＺに入るための訓練に明け暮れる。このときに、コルタナ（後述）と出会い、以降はパートナーとして共に任務や学園生活を送る。ＭＡＲＺには、１２歳で入隊。最年少ながら、１４歳で少尉に昇格。昇格と同時に対シャドウ部隊「白虹騎士団」設立、初代騎士団長に就任。性格は、原作にあった甘さを抜かし、物事を客観的に見るような性格。千冬と束に対し、激しい嫌悪感を抱く以外は、大して変更無し。唐変木も健在。

専用機「テムジン７０７Ｊ」→「テムジン７４７ＪＴｙｐｅａ８」

・コルタナ

高性能ＡＩで、一夏のパートナー。基本、Ｖクリスタルもしくは一夏のＩＳが、彼女の居場所。勿論、ハッキングもできる。主な仕事は一夏のサポート。

コルタナはＭＡＲＺが開発した、施設管理用ＡＩのプロトタイプ。それが、最年少でＭＡＲＺに入る一夏に、ハッター軍曹がテスター兼訓練課程終了記念に、プレゼントしたもの。一夏の下で、全てのテストやら実験が終了した後でも一夏といるのは、単に彼女が言い出したため。

彼女から得られたデータを基に、施設管理用高性能ＡＩ「ＶＲシリーズ」がＭＡＲＺ支部で活動中。（出展・ＨＡＬＯシリーズ）

・織斑千冬

一夏に決別され、ドイツで教官を一年間やり、ＩＳ学園で教職という名の監視されている人。
自分のやってしまったことを、今更になって絶賛後悔中。しかし、どうすることもできずただ、教務に忙殺される日々。ある意味、作者の断罪対象者その１である。そんなに改変無し。

・ハッター軍曹
熱い人、兎に角熱い人。某テニスの熱い人を想像してくれればおｋ。一夏誘拐事件で、一番速く一夏を救出し、その後一夏に特別訓練させた人。若干一夏が熱いのは、紛れもなくこいつせい。
ＭＡＲＺ東方支部の総司令官で、階級は准将なのだが、何故か、部下や一夏は軍曹と呼んでいる。というのも、軍曹のときにやらかしたため。部下や一夏にかなり慕われている。
実は、一夏と千冬の両親と面識があり、有事の際は子供達を頼むと言われていた。しかし、一夏と千冬が決別し離れ離れになったことで、彼は非常に頭を悩ませている。一応、一夏の後見人として書類に記述されている。
ＩＳが発表される以前のパワードスーツ「アファームド・ザ・ハッター」が、愛機。（出展・電脳戦記バーチャロンマーズ）

・ベルリオーズ
作者の中で、織斑父役をどうするか一番迷った人物。因みに、迷ったのはジョシュア・オブライエン。かっこいいよね、ジョシュア。
織斑姉弟に両親がいないのは、両方ともＫＩＡ（戦死）のため。
記録では、ＭＡＲＺに所属しており、任務中に戦死となっている。
（出展・ＡＲＭＯＲＥＤ　ＣＯＲＥ４）

・霞スミカ
作者の中で、千冬と口調が似ていると思われたため、織斑母役として登場。
ベルリオーズと同じく、ＫＩＡ（戦死）となっている。
記録では、ＭＡＲＺ所属で新型パワードスーツのテスト中に、スーツが暴走しそれの鎮圧時に戦死。詳細は不明。（出展・ＡＲＭＯＲ

ＥＤ　ＣＯＲＥ４）
・クリアリア・バイアステン
マーズでお世話になった人も多いはず。別名、白騎士。
「白虹騎士団」の副団長で、一夏が学園に通っている３年間や任務でいないときのピンチヒッター。優秀だが、一夏信望者。
一夏からは、引かれているのに気づいてない。ある種の、鈍感。（出展・電脳戦記バーチャロンマーズ）

組織及びテクノロジー設定集（前書き）

前のやつの修正版。１２月３日修正。

組織及びテクノロジー設定集

この設定を軸に、本小説は成り立っていますのでよく注意して、お読みください。

テクノロジー編

・Ｖクリスタル

地球のとある遺跡にて発見された、クリスタル。８面結晶体で、遺跡にあるのは全長５メートルもある。一夏が所有しているクリスタルは、ＭＡＲＺが解析し独自に切り出したもの。ペンダントタイプ、として身に着けている。

クリスタルの作用で現在分かっているのは、精神干渉作用、空間転移作用、電子干渉作用の三つ。しかし、真の能力は「事象の転送」である。

・定位リバース・コンバート

早い話が、ワープ。ただし、人間サイズが限度。

・シャドウ

Ｖクリスタルの精神干渉作用により、人々の無意識が具現化し凶悪化したもの。ＩＳによる女尊男卑の風潮が世界に広まってからは、出現数が軒並み増加。

組織編

・ＭＡＲＺ

特務機動部隊ＭＡＲＺが、正式名称。

設立目的は、対テロ、対紛争の即時鎮圧が目的で、今となっては専ら、警察機関の代わりとして機能している。まぁ、設立当初からやってることは、何にも変わっていない。

一夏が白虹騎士団を設立する前に、シャドウ討伐を行っていたのもＭＡＲＺ。

東方支部総司令官・イッシー・ハッター准将

東方支部所属・霞一夏少尉

・白虹騎士団

一夏が設立した、対シャドウ用の部隊。選りすぐりの人材に、装備、設備、そして資金。極めて特殊かつ異常なほどの、戦闘集団。最新のパワードスーツを更に、個別にチューンした、「テムジンシリーズ」が正式採用されている。

騎士団長・霞一夏

副団長・クリアリア・バイアステン

（組織及びテクノロジーの出展・電脳戦記バーチャロンマーズ）

第一話　世界に　一人…（前書き）

やっと、一話うp。さて、これから忙しくなるぞー！

第一話　世界に　一人…

「失礼します。霞一夏少尉、出頭しました。」
ビシッと正面を向いて敬礼。制服に似合わず、その顔立ちは少し幼い。
「よく来たな。だがっ！！楽にしていい、ぞ！！これは少々プライベートな問題だ。」
「了解。言っておくけど、娘が最近云々は、聞かないからな。」
「ガッテーム！！」
イッシー・ハッター准将。俺より階級が高く、東方支部の総司令官。なのにもかかわらず、なぜこうも出世できたのか、甚だ疑問だ。
「しかーし！！これは、一夏の問題についてなので置いておく。」
「俺の？」
心当たりが、多すぎる。ドイツ軍のあのチビとのいざこざは、どうにかして解決したし。白虹騎士団設立時の揉め事は、ハッター軍曹の口添えで解決したし。…、他に何かあったか？
「あるでしょう？非常事態だったとはいえ，開発中のＩＳを起動させたのよ。忘れたの？」
「あぁ、あれか。でもあれって、当局がどうにかするんじゃないの？」
「どうにかするから、私達がここに呼ばれたんでしょう。ですよね？」
全く、よくできたＡＩだ。彼女は、コルタナ。高性能ＡＩ、俺のパートナー、以上。
「当局は、世界で唯一のＩＳ男子適格者として、世間に公表するつもりらしい。勿論、データも公表予定だ。」
「……、それって下手すれば、世界が変わる。」
「あぁ。だから、一夏。上官命令として、霞一夏少尉にＩＳ学園に出向し、ＩＳについての基本事項を十分に訓練することを命じる。」

「は？」
つい、間抜けな声を出してしまった。ちょっと待て。俺がＩＳ学園に行くのはわかった、が、その間の俺がやってる仕事はどうそんの！？まさか、当局が人材を派遣するとか？いやいや、あそこがやるわきゃないだろう。いつも、何もしないくせに。
「一夏、言葉に出てるわ。」
「どっから？」
「ちょっと、のところから。」
「まぁそれについてだが、当局に補充要員を要請した。これで、来なければそれまで。来たら、万々歳ってところか。」
「……、了解しました。駄目もとで、専用機は？せめてそれくらいあるでしょう？」
あると信じたい。
「あるぞ。ＭＡＲＺの開発した第四世代ＩＳが。テムジン７０７Ｊが。この機体が、一夏の専用機として運用される。」
「まさかの、テムジン系か。」
扱いやすいんだろうな。武装もシンプルだから、俺は好きだ。なるほど、大体分かってきた。
「コルタナ、ＩＳに関する情報収集、頼む。」
「そう言うと思って、既に収集済み。後で、目を通しておいて。」
「ということで、俺達はここで失礼させて頂きます。」
ドア付近まで戻って、敬礼し部屋を出た。廊下を歩きつつ、これから為すべきことについて考えるのだった。

第一話　世界に　一人…（後書き）

懺悔部屋

前の設定集でミス発見。しかし、どうやっても、本文の修正ができない。どうすりゃいいの！？あれか、ブレオンでかーちゃん撃破か！？余計なもの、一切無しで！！…、普通に死ぬな、こりゃ。

とりあえず、ごめんなさい。いつか、普通に後書きになる日が来るのだろうか。

というわけで、ここらで失礼させていただきます。

第2話　部屋に　一人（前書き）

お前、テスト期間中に何やってんのとか、つっこみはいらないぜ！

第2話　部屋に　一人

廊下を歩きつつ、思うこと。要は、仕事のことなんだが。
「どうしたもんかねぇ～。」
「クリアリアに、任せればいいんじゃないかしら。」
「うぇ。あいつにか？」
「そうよ。優秀でしょ、彼。」
「確かにな。…、内面は兎も角。」
「えぇ、…そうね。」
クリアリア・バイアステンは、あらゆる面で相当に優秀な、俺の部下だ。ただし、内面は、霞一夏信望者でちょいと、残念である。
「つー訳で、クリアリア・バイアステン中尉を白虹騎士団騎士団長代理を命ずる。頑張れや~。」
「は？話が見えないのですが？」
「言ってなかったけか？」
「言ってないわよ、一夏。」
「あちゃ～、やらかした。ついでに書類整理もあるから、俺の執務室に来いよ。どうせ、手伝ってもらおうとしてたし。」
「了解しました。」
ちょうどいい所にクリアリアがいたので、俺の騎士団長用の執務室に、一緒に行くことにした。因みに、何故、階級がごたまぜかというと、白虹騎士団には実力がトップクラスの人間が集められている。そうして集めていくうちに、今のような階級が下の者が上の者に、命令するという奇妙な構図ができたのだ。やったのは、俺だけどね。そうこうしている内に、執務室到着。うん、書類で雪崩が起きそうだ。
「え～とな。俺がＩＳを動かせるのはこの支部の共通認識だ。当局はそれを世界に公表するらしい。で、公表するからにはＩＳ学園に行けとのお達しだ。俺が言っているのは、クリアリアに帰し団長業

務の代行をしてもらいたい、ということだ。」
「そういうことですか。なるほど、クリアリア・バイアステン中尉、了解しました。」
「まぁ、俺がいない間でいいから。休みのときは、戻ってくるし。」
「フフ、学校生活、頑張ってください。騎士団長。」
「それを言うなや、副騎士団長。手伝えよ、ホレ。」
書類の山、一角を押し付ける。単純な嫌がらせでだ。少しはこれで大人しくなるだろう。俺も、書類の山に挑むとするか。果てしないが。
数時間後、何とか二人であの山々を片付けて私室にて、コルタナが調べた情報を見ていた。
何、この専門用語のオンパレード。或いは激戦区。残りの期間で、覚えきれるか？…、いや、覚えなければなるまい。心が折れそうだ。
「思ったんだが。」
「何？」
「この、イグニッション・ブースト、というもの。ＥＮ効率、悪くないか？」
「放出と圧縮の繰り返し、みたいなものだものね。」
「ＥＮのロスが多すぎる。それなら、圧縮から放出した方が、効率良いだろう。わざわざ手間を掛ける必要もない。」
「そもそも、ＩＳのＥＮ自体、容量が少ないものね。」
「ＥＮ管理したいなら、こんなことするな、という宣告なのだろうか。」
ふぅむ、分からん。あの人の意図が。別に、分かりたくもないが。天才と凡人では、差がありすぎる、ということか。
「全く、誰がこんなに複雑に作ったのか。」
「一夏、……。」
「贖罪に痛みが伴うならば、それは甘んじて受け容れなければならない。それが例え、どんなことだったにしても。」
世界を変えた代償、それは一部の人間にとって多大なる喪失と同意

義であった。誰も見向きもしなかった罪に初めて人が眼を向けるとき、人は隠されていた真実を知る。

第2話　部屋に　一人（後書き）

懺悔部屋

今日は、特に無し。これから、クリアリアがどんどん変な方向に行く予定。ここら辺で失礼させて頂きます。

第3話　学園に　一人…（前書き）

誤字修正12月11日

第3話　学園に　一人…

いつの間にか時は流れ流れて、入学式。思えば色々あった。今でこそＭＡＲＺのマークのバッジとして、待機状態になっている「テムジン７０７Ｊ」の、データ収集が面倒だった。というか、あれは普通に死ぬ。コルタナがいなかったら、どうなっていたことか。…、アファームド・ザ・ハッターと一騎打ちとか、マジ勘弁して下さい。死ぬから、ガチで。

っと、終わったらしいのでそそくさと、教室に移動。俺は見世物か。あちらこちらから、視線がキツイ。うっわ～、こりゃ、精神がガリガリ削られていく。…、こんなんでやっていけんのか、俺？なんつーか、ノイローゼになるんじゃないか、これ。

「（フフ、大変になりそうね。）」

「（そう思うなら、助けてくれ。実体化できるだろうが。）」

「（私って、一応重要機密なのよ？）」

「（へぇー、そりゃ初耳だ。でも、機密なのはＶクリスタル内の基盤の方だろう？んじゃ、問題なし。）」

「（物はいいようね。ばれても、知らないから。）」

Ｖクリスタルによる精神干渉の、ちょっとした応用での会話。慣れれば、俺やコルタナの見た映像をやり取りできたりする。ただし、かなり疲れる。

そんなこんなで、教室に到着し席に座る。ど真ん中ってないよな。いくら出席番号順でも、男女の区別くらいつけて頂きたい。こんなところで、男女平等やられても正直困るのだが。本当、どうにかしてるぜ、この世界は。

「織斑くん！織斑一夏くん！」

「えぇ？あ、はい。何でしょうか？」

「ご、ごめんね。お、怒ってないよね？い、今自己紹介で「あ」から始まって今「お」で織斑くん

の番なんです。じ、自己紹介してもらえるかな？」
「了解しました。それが、命令であるならば。」
「いいですか？絶対ですよ？約束ですよ？」
そしてこの低姿勢である。この人、教師か？…その、えと、体格的に。
「了解しました。それと、そう易々と約束するものではないですよ。特に、できない約束はね。」
「え？」
椅子から立ち上がり、周囲を見渡す。一度、深呼吸をし気分を落ち着かせる。何事も最初が肝心、だからな。
「俺は、ＭＡＲＺ東方支部所属、白虹騎士団団長、霞一夏少尉だ。好きなものは、大してない。嫌いなものは、逃げることしかしない者、向き合うことをしない者、無責任な者、だ。それと先に言っておく。次に俺を「織斑」なんて言った奴は、スプライナーの錆にしてくれる。」
その後席に座ろうとしたが、強烈なプレッシャーを感じ、横にずれる。誰だと思い顔を向けると、俺の一番嫌いな人物の一人がいた。
「織斑、殺気を仕舞え。」
「失礼ですが、入学書類には確かに「霞一夏」と書いていたはずですが？」
「しかし、お前は…」
「霞です。どこの誰がやったのか知りませんが、俺は霞ですので。お忘れなきよう。」
それからようやく席に座り、クラスの女子がぎゃいぎゃい騒いでる中、授業の予習をしていた。こうでもしないと、授業に着いていけないからな。時間があるうちにやってしまはないと。
一時間目の授業は、まぁ順調だった。少し校則違反だが、テムジン７０７Ｊのディスプレイを左目に展開させ、分からない単語やシステムをコルタナを介して解説を引っ張り出していた。見る人が見れば、一発でばれるが、下を向きノートや教科書を盾代わりとしてい

たため、事なきを得た。これは、いい抜け道だ。
そして、休み時間。
「おい。」
「んぁ？何か用か？」
「ちょっといいか？」
「あぁ。」
「廊下でいいか？」
「行こう。」
幼馴染に連れられて、廊下に。つか、不特定多数の女子、話したいならそっちから来いよ。俺にはただ、ドン引きしてる様にしか見えないんだが。
閑話休題。
「・・・・・・。」
「用がないなら、俺は戻るが？」
「何故？」
「その問いは、回答が多すぎて俺には理解できないが。」
「この六年間、何があったんだ？何故、一夏は変わった！？」
「俺が変わらないと、本気で思ってたのか？そいつは感動的だが、無意味だな。人は誰しも変わる。変わらないものなど、どこにもないさ。箒。」
俺は呆然としている箒を尻目に、一足先に教室に戻り授業の準備を進めた。この時も、ディスプレイを展開していた。
「（良かったの？アレで？）」
「（良くはないだろうが、態々言う必要もないだろう。）」
「（でも、一番の被害者よ。彼女。）」
「（一番場はないさ。ミサイルが落ちてそれに巻き込まれた奴らが、時系列的にも精神的にも、一番の被害者さ。それ以外は、二番以下だ。）」
「（まぁ、確かにね。）」
「（なまじ優秀な姉を持っちまうと、下もそうだと、人々は勝手に

思い込み挙句、押し付けようとするからな。）」
俺が、そうであったように。いいよな、天才は。何にも努力しなくても、何でも出来て。俺にはとても、そんな芸当できない。
少年は、憎悪する。この世界を変えたある人物たちを。しかし、その事実にまだ誰も気づいてはいなかった。

ＩＳ及び追加設定集（前書き）

誤字修正１２月２６日

ＩＳ及び追加設定集

・ＩＳ「テムジン７０７Ｊ」
霞一夏の専用機。中近距離戦の高速戦闘に特化した機体。全身装甲で、ＭＡＲＺの技術を結集させた第４世代ＩＳの完成版。
武装は、ビームソードとビームライフルが一体となった、スライプナーとパワーボムのみ。これだけの装備でも、十分戦えるのは、偏に一夏の実力あってこそのもの。
単一能力「因果制御」
因果制御は、Ｖクリスタルの本来の能力である「事象の転移」を利用した能力。どんな絶望的状況下でも、発動すれば戦局が一気にひっくり返ることが可能。ただし、零落白夜以上の燃費の悪さに加え、一夏自身、最後の手段として普段は自重している。
装甲に、Ｖアーマーを用いているので、ビーム系に対し圧倒的なアドバンテージを有している。

・Ｖアーマー
某ガンダムのＰＳ装甲のビームＶＥＲ．もしくは、ＡＣ４系のＰＡのレーザーＶＥＲ．欠点として、物理攻撃を受けるとＶアーマーが消える。これは、パワードスーツも同様で、ＭＡＲＺ製のものには標準装備。

・Ｖコンバーター
人工的なＶクリスタルの、劣化模造品。これとＶディスクがあって始めて、パワードスーツやＩＳが実体化できる。早い話、ゲームのハードウェア。

・Ｖディスク
Ｖクリスタルを細かく粉砕し、巨大ディスクに均一に塗ったもの。このディスクに書き込まれたデータをＶコンバーターで再現することにより、実体化できるようになる。要は、ゲームソフトと一緒の感覚。

・Ｖポジティブ
Ｖクリスタルによる電子干渉作用と精神干渉作用にどこまで耐えられるかを、ランクにしたもの。Ｅ，Ｄ，Ｃ，Ｂ，Ｂ＋，Ａ，Ａ＋，ＡＡ，Ｓ，Ｓ＋，ＳＳとランク分けされ、＋とはＡではないがＡＡでは少し違うというようなもの。Ｅ~Ｃが粗製で、どうにかこうにかパワードスーツ「ライデン」「ＶＯＸ」「バル」系が動かせる程度の適性。Ｂ~Ａ＋が最適な適性でＭＡＲＺが一番に欲してる人材。パワードスーツ「アファームド」「マイザーデルタ」「テムジン」系が苦もなく動かせる程度の適性。ＡＡ~ＳＳは最早人外の適性者で、パワードスーツ「テムジン７４７系」「スペシネフ」「フェイ・イェン」「エンジェラン」といった強力かつ癖の強いパワードスーツを平気で乗りこなす。
ただし、適性が高いとそれだけシャドウになりやすい。
霞一夏、ランクＳＳ
イッシー・ハッター　ランクＡＡ
クリアリア・バイアステン　ランクＳ＋
なお、白虹騎士団団員の平均ランクはＳである。
・フレッシュ・リフォー
ＭＡＲＺのシャドウ研究所が、シャドウ汚染患者兼ＭＡＲＺ所属のパイロットようの医療プラントとしての施設。ある程度ならば、シャドウ汚染患者の治療ができ、高い水準の医療環境を提供しているプラント。民間の患者も受け容れていることから、世俗的認知度は高い。ＭＡＲＺの資金の一部はここから出ているといっても過言ではないくらいの、人気の高さ。実は、イケメン目当ての奥様方が多いとか。所長は、リリン・プラジナー。
・リリン・プラジナー
わずか１２歳で、研究所所長に登り詰めた天才少女。一夏の親友で、一夏を実験台に新薬のテストをしているとかしてないとか。腕はいいが、世間知らずで、一夏の頭痛の種。
（この章の全設定　出展；電脳戦記バーチャロンマーズ）

第４話　断頭台への行進・起（前書き）

いつの間にか、この小説のアクセス数が１００００件超えていた件について。

な、何すればいいんだろうか。本気で悩む今日この頃。

第４話　断頭台への行進・起

それで何事もなく授業は進み、俺は退屈していた。そもそも、ＭＡＲＺに入るに辺り、それ相応の学力が求められる。それ故、俺は訓練と平行して、一応大学レベルまでの学力はある。従って、高校でやるような勉強は俺にとって簡単なのだ。だが、ＩＳの授業は面白い。山田先生という合法ロリがいるから結構、楽しんでいるけどな。

「（恐るべし、合法ロリ。）」

「（いつからロリコンになったのかしら？一夏？）」

「（いや、俺はロリコンじゃない。断じて。ただ、眼福だ、と思っただけ。）」

「（男の子だものね。）」

「（…、写真を売り捌いたら、儲かるだろうか…）」

「（やめなさい。本人の名誉のために。）」

まぁ、ＭＡＲＺってかなり給料が良いから、金に困ってないんだが。しかし、俺が男だといい加減認識してもらいたいものである。いくらか、女性にしか分からない単語出てきたぞ。

そして、いつもの如く休み時間。

「ちょっと、よろしくて？」

「…、イギリス代表候補生セシリア・オルコットか。何の用だ？生憎、手が離せん。手短に頼む。」

うわっ、女性至上主義者が来た。このプライドの塊みたいなものと、一緒にいたくねー。

「な、何を…！まぁ、私のことを知っていらっしゃったようなので、見逃して差し上げますわ。入試のとき教官を倒したエリートですが、泣いて頼むなら、教えてあげてもよくってよ？」

「よし、コルタナ。この、馬鹿自慢女が倒したらしい教師のデータ、見せてくれ。どうせ、たいしたことはないとは思うが。」

「待って、…。出たわ。ＩＳ学園では、実力は中の下ね。入試時の

ＩＳは打鉄。遠くから弾幕を張れば、勝てない相手じゃない。」
「だ、そうだ。俺に自慢したいなら、世界最強に一騎打ちで勝つか、一ヶ月で大検とるなりしてみろ。それと、俺にはコルタナというアンタより優秀なＡＩがいるから、別にいーわ。」
「な、なんですの！？それは！！」
「何だっていいだろう？つか、時間だぜ？」
「時間ですって！？何ｗ「さっさと席に着かんか、馬鹿者。」～～ッ！！」
バコンッ！！
今、出席簿らしからぬ音がしたし、頭蓋骨から変な音が聞こえたんだが。体罰って、今時期ご法度じゃないのか？知ってんのかな、いや、知れねーなこれは。
「～～ッ！！いい！？逃げないことよ！！よくって！？」
「逃げられない上に、よくもねーよこの馬鹿自慢女。」
セシリア・オルコットは席に戻り、われらが暴君、織斑千冬によるパーフェクトＩＳ授業が始まった。ＩＳの各種武装の説明だが、ぶっちゃけ、俺には関係なかったり。
理由は簡単。俺のＩＳには、追加装備が開発されてないのだ。ついでに言うと、単一能力を発現させる為に、アンロックはおろかウイングスラスターも無い。勿論、バスロットの大半をそれに回しているので、余計に容量が無くなった。まぁ、乗りこなせるのが俺だけだった、っていうのも拍車を掛ける要因なのだが。それでも、パワードスーツにボコ半にされた俺だけれども。
「そういえば、クラス代表を決めなければな。」
面倒臭そうだな。やりたく、ねぇな。ここでも、要職とか勘弁してほしい。というわけで、冗談でも言って回避しよう。面倒は嫌いだからな。
「先生。」
「どうした霞？」
「俺、クラス代表なんか、やりたくありません。」

「なんですって！？」
お前は食らいつくな！話がややこしくなるでしょうがっ！黙れ、Ｓｈｉｔｕｐ！！
「今、何とおっしゃいました？クラス代表なんか？貴方、世界で唯一の男性適合者だからといって、調子に乗らないでいただけるかしら？」
「（コルタナ。）」
「（ＯＫ、分かってる。）」
「私は、こんな文化的に後進した島国にサーカスしに来たのではございません。それに、意味も分からないような極東の猿と、一緒にしてもらっては困ります。」
「成程。随分、偉そうだな。ふ、うらやましいよ。」
完全に、ブチ切れてます。クラスの皆、すまん。殺気が抑えられそうにもない。
「身の程知らずも、いい加減にしろよ？小娘。誰に向かって、そんな口を利いているのか、その足りない頭で考えたらどうだ？今の、貴様の発言は、ＩＳ開発国である日本を俺の所属する特務機動隊ＭＡＲＺを、そしてイギリスの品位をすら、貶めたんだ。」
「ついでに言うなら、今の貴方の発言はイギリスが言ったことと、同意義になるのよ。」
見る見るうちに、顔が青くなっていく馬鹿一人。自分の失言にようやく気づいたか。でも、もう遅い。思ったんだが、代表候補生って一体どんな基準で選ばれるんだ？強さか？それとも、ＩＳとの適合率か？どちらにしろ、死に腐れ。
「どうする？ちゃんと、ボイスレコーダーに撮ってあるんだが？」
バダンッ！
「ちょっ、衛生兵ー！衛生兵ー！」

第４話　断頭台への行進・起（後書き）

後書き

べ「大丈夫か？」

（返事が無い。ただの屍のようだ。）

霞「さっさと起きろ。また、やらせるぞ？」

！！！い、いやー、起きましたよ！？起きました！！

べ「何をやらせたんだ？」

霞「たいしたことじゃない。プロトタイプネクストを2体同時に、相手にさせただけだ。ブレオンで。」

べ「（我が妻ながら、恐ろしいことをする。）」

霞「勿論、月光だがな。」

べ「頑張ったな。うｐ主。」

し、死ぬかと思ったよ。まじで。しかも、片方はジョシュアとかマジキチ。

べ「それはおいといて、予告だ。」

かすみ「あぁ。次回、一夏に、とある情報が耳に入る。激昂する一夏、その情報とは？次回第５話　断頭台への行進・承　お楽しみに。」

第5話　断頭台への行進・承（前書き）

誤字修正12月17日

第5話　断頭台への行進・承

「…、まぁ、よくもまぁ抜けぬけとあんなことを言えたものだ。正直、あれが代表候補の言うことか？」
「……。」
「もう少し、まともな感性を持ったものがいなかったのか？同情に値するよ。さて、先生、授業に戻りましょう。こんなことに時間をとっている場合ではないでしょう？」
この数時間で分かったこと。兎に角、人間としてのレベルが低い。立っている足場が高すぎて、自分の足元が見えてない。代表候補生、こんなことだと、高が知れるな。普通、自分の発言の影響力なんて気にしないし、する必要もない。だが、代表候補生となると、話は別だ。このようなクラスのなかでさえ、代表候補生ともなると自分の発言が、そのまま自国の発言に取られることもあると、何故理解しない。まぁ、それで困るのは俺じゃないから良いけどな。しかし、良かったんじゃないのか？代表候補、その影響を身を以って教えたんだからな。
「（先が思いやられるな。）」
「（この調子じゃねぇ。）」
「（今頃支部内は、戦闘態勢でも取ってんじゃねぇの？）」
「（一夏が、私に情報を流させたからでしょう。それにしても、その確信犯的愉快犯な性格、どうにかならない？）」
「（…、善処はするさ。）」
そして、授業は滞りなく進み、俺は、必死にノートを取っていた。視界の隅に、何やら山田先生までノートを取っていたのを見たが。何が、取る程のものか？これ？だって、教科書に載ってることだけをただ、つらつらと言ってるだけだぜ？取る必要、全く以ってないと思うんだけどな～。もうちょい、教科書に書いてないこととか、ここだけの話とか、色々あるでしょうに。…、俺としては、織斑先

生にそんな器用なことやってのけるなんて、思っちゃいないがな。
むしろ、ここまでの恐慌政治とスパルタ教育に脱落者が出なかったことに、俺は引いてるよ。
そして、昼休み。
やっほーーい！！飯だ！飯だ！ＩＳ学園って、食堂にも金掛けてあるらしいから、うまいらしいんだよな～。これは、期待大、だな。
早速、食堂へＧＯ…？
バタンッ！
「ハァハァ、貴方よくも・・・。決闘ですわ！！その、減らず口、叩きのめして差し上げますわ！！」
馬鹿自慢女が、何やら厄介ごとを、持ってきやがった。しかも、決闘だと？ふざけた真似を…！
「言っておくがな、俺は面倒が嫌いなんだ。そんなにやりたいのなら、よそでやれ。」
「あら？負けるのが、そんなに怖いのですの？」
こいつ、言わせておけば…！！！決めた。こいつは、ぶちのめす。
完膚なきまでに、叩きのめす。
「良いだろう。吠え面かくなよ？」
「決まったな。１週間後、第３アリーナで霞対オルコットの模擬戦を行う。両名とも、準備を怠らないように。」
「はい。負けたら、私の小間使い、いえ、奴隷になってもらいますから。」
「了解。世界人権宣言も知らないのか？ッフ、ざまぁ無いな。」
片や、顔を真っ赤にして怒る少女。片や、涼しい顔で挑発し続ける少年。
勝敗は、もう、決まってたりする。南無～。
それから、食堂で昼飯食って、授業。さして面白くもなんとも無いので、容赦なくカット。つーわけで、放課後。
「ふぃー、……、やり過ぎたか？」
「やり過ぎよ、十分に。」

「反省はしている。やり過ぎた。しかし、こんな所で働いているとは。」
「事実上の、監視ね。それに、自分の弟まで人質に取られているようなものだもの。」
「俺は、あいつとは何の係わり合いも無い。赤の他人だ。」
俺は、ノートや教科書を片付けながら、コルタナと話していた。主に、オルコットとのいざこざについて。自分でも、やり過ぎた、という自覚はある。どうも、俺はプライドの高い奴と、馬が合わないらしい。頭に来るんだよな～、プライドの高い奴相手にしてると。
「あ、織「（ギロッ）」ひぃ、か、霞君！まだいたんですね。良かったー。」
「何か用でも？」
「はい。部屋割りのことですが…。」
「１週間ほど、支部から通えと聞きましたが。」
「それが、急遽変更になって、寮に入ることになりました。」
「勿論、一人部屋ですよね？」
「いや、あの、そのぉ～、…」
ＯＫ、分かった。女子と相部屋か……。
「非常識にも程があるだろうがー！！恋人でも、ましてや夫婦でもないのに一緒の部屋って、どういう了見してんだーー！！一番やったら、駄目だろがーーーー！！！！」
怒髪天を突く、まさにこのことかしら。当然よね。ＩＳ学園の寮制が相部屋方式を採用しているのは知っていたけど、男性にも適用して、一体何させたいわけ？まぁ、一夏のことだから定位リバース・コンバートで支部から通うのでしょうけど。

アンケート（前書き）

ファイルは持ってきたのになしてこうなるかなぁ？

アンケート

霞「今日は本編でもなく、また番外編でもない。で、うp主さっさとしろ。」
はい…。えー、このたびＩＳ～一夏の叛抗～ご覧の皆様、うp主こと終那がプロットを書いたノートを学校に置き忘れるという失態を犯しました。なので、月曜日まで本編はおろか、番外編までも投稿することが出来ません。楽しみにしてくだっさた人、本当に申し訳ありません。
霞「あぁ。本当にな。貴様、分かっているのだろうな？」
し、仕方ないじゃん！！学校しかプロット書く時間無いんだからさ。
霞「…、言い残すことは、それだけか？」
へ？
霞「さて、シュミュレーターに逝くぞ。加減はしてやる。相手は、レイヴンだ。ただし、ラストレイヴンに登場した全レイヴンだがな。」
どこが、加減したんだーーーー！！！丸っきり、死亡フラグでねぇかぁぁぁ！！！！！！
霞「易しいだろう？ベルリオーズ、後は頼む。」
ガシッ、ズルズル
べ「…、行ってしまったか。それよりも、これを読めば良いのか。」
べ「本編での最初の脱落者、篠之乃箒にパワードスーツ何乗せるか、だそうだ。ＭＡＲＺに入れることは、確定らしい。
1、テムジン系列（例；ファイアフライ）
2、フェイ・イェン（例；ヴィヴィット・ハート）
3、エンジェラン（例；アイスドール）
項目は増えても良いし、兎に角バーチャロンの機体なら何でも良い。なかなかうp主じゃ決められないから、皆様の意見を参考にしたいそうだ。まぁ、こんなところか。意見・感想・うp主への叱咤激励

等々、随時受付中だ。それでは、この辺りで失礼する。」
ぎゃぁぁぁぁーーー、こっちくんなーーーー！！！2対1とか、卑怯だーーーー！！もうやめて！うP主のヒットポイントは0よ！！
…、ズベン貴様まじねぇわ。

第６話　断頭台への行進・転（前書き）

誤字修正１月１０日

第６話　断頭台への行進・転

あれから一悶着あり、結局、定位リバース・コンバートを利用してＩＳ学園と支部を行き来することになった。当然といえば、当然の結果だ。つか政府、ちゃんと真面目に仕事してください。お願いします。

「ということがあったんだ。信じられっかよ。あーあぁ、やってらんね。」

「しかしよぅ、女の子、よりどりみどりなんだろう？」

「女子と書いて変態と読む奴なら、たくさんいたが？」

「「…。」」

うん、やっぱり支部のおばちゃんの食事が一番だ。お袋の味って感じで美味い。ＩＳ学園も中々捨て難いが、俺個人としてはこっちの方が好きだ。長年、食べなれているせいだろうか。因みに今日は、ハヤシライスにサラダｏｒスープそれとデザート。ＩＳ学園みたいに選択方式じゃないが、その分、選ぶ手間が省けるから結構助かる。

「イ、イメージが…。」

「脆くも崩れ去ったな。」

「Ｏｈ，ｍｙ　ｇｏｄ…」

「Ａｍｅｎ」

「それより、イチカ。お前、またやったのか？懲りないな。」

「見てたのか。」

「あぁ、そうともさ。イチカ、お前の行動や言動はガチで両親にそっくりだ。おかげで、寿命が何年縮まったか。」

父；ベルリオーズ、母；霞スミカ。それが、俺の両親。ＫＩＡ認定されたし、記憶にもほとんど残ってないけど。

「そいつは良かった。」

「良くねぇーわ！！」

ゴチンッ。

脳天直撃なんて、しなくても良かったじゃないが。あー、痛。その怪力を、もっと別のところで発揮しろっつの。何故、俺限定なんだ。理解出来ん。
「それはそうと、イチカ、ビックニュースだぜ。」
「イテテ、…。ビックニュースぅ？何が？」
「それがな…。」
「月にもvクリスタルが発見された。」
「って！！ハッター軍曹！？いきなり、自分の台詞を取らないでください。」
「おう、Ｓｏｒｒｙ．ここ、いいか？」
「はい。どうぞどうぞ。」
ハッター軍曹、基、ハッター准将が空いている席に座る。トレイには大盛りのハヤシライスが。よく、食いきれるよな～。
「それって、本物なんですか？なら、どこの所有・管轄になるんです？」
地球以外にもvクリスタルあったなんて、想像してなかったわけじゃないが。地球のアフリカにある、vクリスタル（通称；アースクリスタル）
は、ＭＡＲＺの管轄だ。警備及び周辺地域の封鎖も行っている。それだけ、アースクリスタルの影響が強い、ということだ。それじゃなくても、周辺地域ではシャドウの出現率が、高い。これも、封鎖の原因のひとつでもある。
最大の理由。それが、環境の劇的な変化だ。アフリカは現在、アースクリスタルの影響で周辺地域の環境は乱れに乱れ、人が住めなくなってしまった。幸い、パワードスーツを着込むことで辛うじて、活動可能になってはいるが。それでも、vポジティブの適性の問題で、多いわけじゃない。
vポジティブ。パワードスーツを動かす為の、必要な適性。低いと動かせないし、高いとシャドウになる確率が高まる。シャドウになってしまったら最悪、自我崩壊し廃人になる危険性がある。ＭＡＲ

Ｚ常識として、ランクＢ～ランクＡ＋くらいが、丁度良いとされている。俺はランクＳＳだけど。
「世界の中でも、宇宙まで行ける技術を持っているのは、ＭＡＲＺだけだ。それに、ｖクリスタルの管理や運用はＭＡＲＺの権限でしか許可が下りていない。」
「ってことは、つまり…。」
「月のｖクリスタル、ムーンクリスタルの管轄はＭＡＲＺがやることになっている。」
「ただでさえ、ｖポジティブの高い奴なんてそうそういないのにな。」
「「「仕事が増えるわけか…。」」」
俺たち、下士官トリオは揃って、ため息を吐く。あぁ、当局も事務員採用試験でもやってくんないかな～。
「まぁ、心配Ｎｏｔｈｉｎｇ！まだ、あると分かっただけですぐに人員を派遣なんてしないさ。そもそも、駐屯基地すらまだなんだ。」
「ですよね～。…、少なくとも、まだ、ゆっくりしていられるな。」
「というか、イチカの場合、どうするんだ？」
「このままＩＳ学園じゃねぇ？」
「それが有力か。」
「俺は向こう３年間、学校だから、頑張れや～」
それからは、駄弁ってた。主にハッター准将の親ばか話に「リア充死ね！もげろ！吹き飛べ！」と俺達三人で、支部内の非リア充代表としてリア充をボコってた。無論、ハッター准将に返り討ちに遭ったが。ハッター准将、マジ強い。
所変わり、支部内訓練場。
「（来い、テムジン７０７Ｊ）…、さてと、ちょいと付き合ってくれ。」
「うい。５分で良いか？」
「おう。」
「両者、始め！」

「「ＧＥＴ　ＲＥＡＤＹ！！」
テムジン７０７Ｊとアファームド ＴＴが同時に動き出し、次々と攻撃しては避けるを繰り返していく。その様子を、電脳虚数空間の奥深くから、見ているのものがいた。
＜因果律が交じり合い、特異転となってしまった哀れな子。どうか、無事で…。＞

第７話　断頭台への行進・結（前書き）

誤字修正１２月２６日

第7話　断頭台への行進・結

あの模擬戦、実はＩＳとパワードスーツの戦闘だったりする。細かいことはおいといて、約束の１週間後。第三アリーナにて。
「一夏、大丈夫なのだろうな？」
「勿論。コルタナもいればテムジンも俺にはある。あの酔っ払いに負けるほど弱くは無いつもりさ、箒。」
「そ、そうか。な、な、ならいい。さっさと行ってこんか！」
「そうだぞ、霞。さっさと始めてしまえ。」
「ＹＥＳ」
ピットの方に悠々と歩きながら、テムジンを展開していく。ピットに着いたと同時に、最終チェック。
「一夏、全システムチェック完了。エネルギー異常なし。Ｖアーマー、Ｖコンバーター、共に異常なし。戦闘モード起動させるわ。」
「了解。コルタナ、サポート任せる。…、霞一夏、テムジン７０７Ｊ、出撃する！！」
ピットから出て、宙を舞う。全身装甲で、他のＩＳに比べると少々大きく、右手には巨大なランチャーがその存在感を放っていた。
「よく、逃げずに来ましたわね。褒めて差し上げてよ。…、ｅｔｃ」ターゲット確認。排除開始。
「敵機撃破で、Ｇｏ　ａｈｅａｄ！！」
馬鹿自慢女が何か言っていたが、問答無用でスライプナーのニュートラルランチャー出力８０％を、ぶっ放した。何か言っている間は攻撃されない、とでも思っていたらしい。俺は、そんなに甘っちょろくない。
「他の奴らと同じだとでも、思っていたのか？」
「っく。踊りなさい！私、セシリア・オルコットとブルーティアーズの舞踊曲で！！」
「オールレンジ攻撃か。成程、厄介だ。」

っく、開幕と同時に攻撃なんて、一体どんな神経しておりますの！？しかも、シールドエネルギーの三分の一を持っていくほどの威力なんて、私、聞いていませんわ。狙撃しようにも、相手がこうも動き回られるとなかなか狙いが点けられませんし、こうなったらブルーティアーズで…。
やっと、真打の登場か。存外、速かったな。しかし、ＢＴ兵器は６機じゃなかったか？まぁ、邪魔立てするなら容赦はしないけどな。
「コルタナ、ビットの機動予測頼む！」
「了解！こちは任せて！」
「～～～っ！！どうして！どうして！？中りませんの！？」
「機動さえ読めれば、これくらい造作も無い。貴様では、所詮役不足、ということさ。」
「死角に入り込み、反応が遅れそうなところからの攻撃。よく考えたじゃない、貴女にしては。でも、ＢＴ兵器を使用中は貴女の動きも停まるみたいね。」
「児戯だな、貴様。まるで、よちよち歩きだ。」
ＢＴ兵器の制御が乱れた。この程度の挑発に乗るとは、やはり俺達の敵ではなかったな。もう少し、骨がある奴だと思ったんだが、見当外れだったらしい。さっさと、この茶番を終わらせるか。俺は、スラスターを最大戦速にし、接近戦を仕掛けようとした。
さっきから、役不足だの、何だのかんだの色々言ってくれますわねぇ。許しませんわよ！こうなったら、意地でも勝って奴隷としてこき使ってやりますわ！！
「この距離なら…！！」
「掛かりましたわね。」
「何！？」
「ブルーティアーズは６機あってよ！！」
「ミサイル型！？駄目！避けられない！！」
「っち。なら、これでどうだ！！」
ミサイル型に、パワーボムをぶつけて二つとも、誘爆させる。爆風

により、一時的に視界が制限されるが、それは向こうとて同じこと。
「コルタナ、熱感知レーダーに切り替え。ＥＮ残量１１７か。問題無い。」
「どうするの？」
「ＭＡＲＺ戦闘教義指導要綱第１３番　一撃必殺。」
スライプナーにＥＮを供給し、爆風により出来た煙幕の中に突っ込む。ブルーティアーズも迎撃するが、ビーム類に比類なき強さを発揮するＶアーマーの前には無力であった。
「っはぁあ！！…、ちょろいもんだな、イギリス代表候補生は。」
「これで、代表候補生とは笑わせてくれるわね。」
…、珍しくコルタナが不機嫌だ。まぁ、気持ちは分からんでもないが。肩書きに比べ、実力不足なめんが、終始見受けられたからか。イギリスも存外、ＩＳを十全に動かすことのできる人材に、四苦八苦していて、あらゆる面で役不足なこいつにしたのかもしれない。この程度とは、堕ちたものだ。
「勝者、霞一夏。」
模擬戦は終了し、ピットに戻った。ＩＳを解除し、そのまま、織斑先生＆山田先生＆箒のいる所に直行。観客席は、まだ興奮覚めやらぬ状態で、とても五月蝿かった。
「一夏！よく勝てたな。１年では、トップクラスの実力者らしいのに。」
「あれで、か。…、底が知れるぜ。」
「しかし、トップクラスの実力者をこうも簡単に倒すとはな。姉とし「俺に姉などいない。」…。」
「姉だと？何をふざけた事を。いい加減にしてくれ！！」
一夏はそう言って、ＭＡＲＺ東方支部に帰ってしまった。一夏が変わってしまったことに戸惑うと同時に、私の心のどこかで自分と一緒だと、ほっとした。一体、この６年間で何があったというのだ、一夏。

番外編　Ｃｒａｄｒｅ（前書き）

そして人は揺り籠で空を飛び続ける、か。お前の答えだ。私はそれで良いさ。ーＡＣｆａ　セレン・ヘイズー

番外編　Cradre

酷い話をしよう。少年は、ずっと揺り籠の中で育ってきた。否、籠の中で生きることを強要されてきた。大切なものを、宝石箱に入れて、失わないように。傷つかないように。しかし、それでもいつか、揺り籠から出て自らの足で歩くときが来る。その時、手元に残るのは、少年が出て行った揺り籠と少年が出て行ったという事実だけだ。多分、その頃の俺は姉に、疑いを持っていたんだと思う。俺とＩＳ、どっちが大切か。そして、姉と比べられることが、たまらなく嫌だった。何故、姉に出来て俺は出来ないのか。いつもいつも、その繰り返し。次第に、姉の存在が重くなっていった。世界最強、その称号を持つ姉が、たまらなく重く感じ始めたある日のこと。

「一夏、モンド・グロッソに一緒に行かないか？」

姉からの一本の電話。日本代表である姉は、第二回にも出場するらしい。まぁ、姉のような化け物並みの身体能力保持者がそうそういてたまるか。これは、チャンスだと思った。姉に、俺とＩＳ、どちらが大事か問う為の。俺は、二つ返事で了承し、電話は切れた。ボストンバッグに荷物を詰め込み、荷造りを開始した。なんとなく、この家にはもう戻ってこないような気がした。思えばこの時、俺は、無意識下で姉と決別するのを感じ取っていたかもしれない。

飛行機に乗り、ドイツに着いた。そのまま、ホテルに行き、先に部屋で待っていた姉と合流。モンド・グロッソの開会式にでた。

その後、外をぶらぶらしていたとき、公園で泣いている女の子を見つけた。ブランコに座って、泣いていた。ドイツ語なんて当時は分からなかったが、とりあえず近寄った。今思えば、馬鹿な行為だったと思う。大体、電子辞書片手にコミュニケーションしていたのだから。

「“どうして泣いているの？”」

「……！！」

「“ドイツ語分からないから、何かに書いてくれると嬉しいな。”」
「…、“お父様に、役立たずって、言われたんだ。”」
辞書で意味を調べつつ、文をつっても単語をただ並べただけのものを書いていった。物凄い時間がかかったが、仕方なかった。女の子も待っていてくれたし、俺も待っていた。
「“それなら、見返してやれば良いじゃん。自分は役立たずじゃないって、見返してやれば良いじゃん。”」
「…、“しかし、私は…。”」
「”誰しも一発で出来るわけがない。だから、努力するんでしょ？”」
「…“努力…。”」
女の子は、もう泣いてなんかいなかった。瞳は腫れて充血していたが、そこには確かに光があった。
「“有難う。礼を言う。私は”ラウラ・ボーデヴィッヒ“だ。”」
「“どういたしまして。”イチカ・オリムラ“だよ。”」
これが、俺とラウラのファーストコンタクトだった。このときの俺達は、あんな形で再会するなんて思っていなかった。
そんなこんなで、決勝戦当日。姉が決勝戦まで勝ち残り、おれは姉の試合を見に行く為、ホテルを出た途端、羽交い絞めされ薬品を嗅がされた。気絶してしまったらしい俺は、どこかの廃工場監禁されていた。ご丁寧に、ロープで逃げないようにしっかり固定されていた。暗くてよく分からないが、どうやら姉が目的だったらしい。それを聞いて、なんだか気が抜けた。結局、姉かよ。そんな思いが渦巻いて、ここで死ぬのもいいかなと思ったとき。
「レッツバーニングジャスティス！！！」
「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！！！ＭＡＲＺが来たぞぉぉぉぉぉーーー！！」
ＭＡＲＺ？聞いたことがある。対テロ対紛争の即時鎮圧組織。何故、俺を？あぁ、姉の家族だからか。所詮そのぐらいしか、俺の存在価値なんて無いし。姉はＩＳにお熱だし。アレ？俺っていないほうが

良いんじゃねぇ？とういか、いない方がむしろ好都合だったり…？
「別に、ここで殺してくれもいいんだけどなー。ハァー、俺って何のために生かされてんだろうな？」
ＭＡＲＺの人がこっちに近づいてくるのが分かる。銃声とか悲鳴とか人を殴る音が、だんだん近づいてくるから。…、でも、殴る音が聞こえるって、一体どんだけの力で殴ってんだ？あり、えなくもないか。なんせ、世界に姉並みの身体能力保持者がいてもなんらおかしくもなんともない。
バンッ
「大丈夫か！？レスキューに来た、ぞ！！」
「アンタ、誰？」
「俺は、「テメェェェェェ、死ねェェェェェ！！！」おっと、セイッッ！」
なんか、暑苦しい人が来て、誘拐犯がナイフ持って突撃かましたところに、カウンターでＫＯしていた。一瞬のことだったが、すごくカッコいいと思った。
「俺、一夏！織斑一夏だ！なぁ、俺もアンタみたいになれるか！？」
「一夏、やはりその人達の…。イッシー・ハッター大佐だ。ハッターで良いぞ、一夏。」
その後、ハッターさんにロープを解いてもらっていると…
「一夏ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
ＩＳ「暮桜」を展開した姉が来て、何を思ったのか雪片をハッターさんに振り下ろしやがった。俺は咄嗟に二人の間に割って入った。左肩から腕にかけて、激しい痛みが走った。が、突然痛みを感じなくなった。違和感を感じたが、その時はどうでも良かった。
「姉さん、俺、貴女のことが嫌いになりました。この人と一緒に行くので、さようなら。」
少年は揺り籠から出て、外で生きることを決めた。Ｃｒａｄｒｅ、それは揺り籠という名の箱庭。

番外編　Ｃｒａｄｒｅ（後書き）

後書き

ふぅ、や、やっと、終わったぁ～～。

べ「よく、頑張ったな、うｐ主。」

に、人間やればできるもんだね。もう、やりたくないが。

霞「それは、今後のうｐ主の行動次第だな。今度やらかしたら、ナインボール＝セラフとガチタンでやらせるぞ？」

な……、ナインボールはまずい。

べ「ファンタズマじゃないのか。」

霞「ＡＭＩＤＡでもいいが？」

（こいつら、本気だ。）兎も角、番外編始まったねぇ～。

霞「元はうｐ主が忘れなければもっと早くに上がっていただろうが！」

そ、そうです。ごめんなさい。だから、何卒、シュミュレーターだけはご勘弁！！

エ「…、いつも、こんな感じなのか？」

べ「あぁ。それよりも、次予告頼む。」

エ「任せておけ。次回、一夏に束の間の休息が訪れた。クラスにだんだん馴染む一夏だが、女子が聞きたいことは山ほどあるようだ。次回、第８話　休息　次なる…　お楽しみに。」

第8話　休息　次なる…（前書き）

誤字修正12月26日

第8話　休息　次なる…

ＭＡＲＺ東方支部にの自室に戻った俺は、脱がずにベッドにダイブした。コルタナはホログラムとして実体化し、ベッドの端に座っている。

「今更、姉貴面とは…。俺よりＩＳを取りやがったくせに、何をぬけぬけと。いてほしいときに、いなかったくせに、偉そうにしやがって…。……、俺がどれだけ寂しかったか、辛かった、か、知らな、い、くせ、に、…ッヒック。」

俺は枕に顔を埋め、泣いた。そんな俺の頭を、泣き止むまでコルタナは撫でていてくれた。思えば、泣いたのは久しぶりな気がする。多分、最後に泣いたのは、両親の最期のメッセージを聞いたとき以来だ。

一夏は、泣き疲れて眠ってしまったようね。今回、抑えてきたものが溢れてきて、どうしようもなかったんだわ。一夏って、上手く吐き出すことがなかなか、出来ない不器用な部類だから。だから、辛くなっても何も言わず、自分一人で抱え込んじゃうのよ。幼少期の家庭環境が、一番の原因なのでしょうけど。

「でも少しくらい、私に言ってくれても良いんじゃない？一夏、何のためのパートナーなのよ…。」

私にも背負わせてくれたって、良いんじゃない？そのための、パートナー、でしょ？

翌日、学校に行き、朝のＳＨＲに山田先生が見事に爆弾を落としてくれやがった。ＡＣシリーズのカクミサイル並みの威力だった。って、俺は何を言ってんだ？

「クラス代表は、霞一夏君になります。１年１組霞一夏。あ、一繋がりで縁起がよさそうですね。」

「は？俺は面倒が嫌いなんですが…。何故に？」

「それは、私が推薦したからですわ。」

席を立ち、俺のほうに向かってくる馬鹿自慢女。昨日と豪く態度が、違わないか？あれ？俺だけ？
「私、貴方に敗れて初めて、自分の態度を反省しましたの。そして、分かりました。人として、まだまだ未熟だということが。貴方に対する数々の暴言、申し訳ありませんでした。」
「…、反省してるっぽいし、謝罪の言葉も聴けたから、いいよな？皆？」
コクコクと、クラス中から許しの声がして、一件落着。って、
「何で、俺なんだぁーーー！！？？」
「かすみんが、クラスで一番強いからだよ～。」
「……、理由くらい、分かってはいたんだがな。」
机に、突っ伏す。理由は、大体想像はしていた。ここまで予想通りだと、誰が予想できたよ。まぁ、こういう面倒事はＭＡＲＺや白虹騎士団で慣れているから良いんだけどさ。
で、いつも通りの授業風景と休み時間は面白くも無いのでカット。件の織斑先生の授業ｉｎグラウンド。ＩＳを使っての飛行訓練らしい。先に、歩行訓練やった方がとか、思ったが他所のことに口出すのもあれなので、黙っておいた。
「霞、何故ＩＳスーツを着ていない？」
「自分のＩＳはスーツすらもＩＳに登録してあるので必要ありません。」
と言っても、別にあるんだけどな～。ただ、５月の初夏の気温にタンクトップとスパッツって、寒いだろう？女子は、知らんが。まぁ、必要になったら、ＣＩＳから引っ張り出すさ。
「次からは着てこい。」
「ＹＥＳ．」
「オルコット、霞、ＩＳを展開しろ。」
「「はい。」」
イメージするは、戦場を疾駆する青い騎士。
「（来い、テムジン。）」

俺の体を中心に、０と１の光の帯が形成されていく。そして、徐々にテムジン７０７Ｊがリバース・コンバートされ、最後にテムジン最大の武装である、スライプナーが実体化する。リバース・コンバートが終了すると、０と１の光の帯が弾け飛ぶ。これが、ＩＳ「テムジン７０７Ｊ」の正式な展開の仕方だ。
「一夏、全システムクリア。エネルギー、チャージ完了。Ｖアーマー、Ｖコンバーター、共に異常無し。いつでもどうぞ。」
「了解。しかし、リバース・コンバートはいつ見ても派手だな～。」
「仕方ないわ。テムジンは、バーチャロン技術がふんだんに使われているのだから。」
「展開は出来たようだな。オルコット、霞、飛行してみろ。」
「「はい。」」
セシリア（そう呼べと言われた。）のブルーティアーズが先行し、俺も続く。すぐにシールド限界高度に到達。天井、低いな、ここ。言い換えればそれだけ、テムジン７０７Ｊが兵器として完成している、ってことなんだが。実験機が主戦力の学園じゃ、この程度が関の山か。
「おるこっと、霞、急降下と急停止。目標は地上１０ｃｍだ。」
地上１０ｃｍか、どうしてなかなか無茶振りするかな。一歩間違えれば、地面とキスする羽目になるだろうに。
「一夏！！さっさと降りてこんかぁ！！」
箒、叫ぶのはいいが、先生から物をぶんどるのは、正直、いかがなものかと。仮にも教師だぞ。仮にも。山田先生、ガンバ。
「では、お先に。」
「おう。」
やはり、代表候補生。この程度は造作も無いか。…、面白くねぇ。
「コルタナ、ＰＩＣ解除。メインブースターの切ってくれ。」
「ハァ、呆れた。怒られても知らないから。」
ＰＩＣとメインブースターを切る。すなわち、墜落だ。本来なら、こんなことはしなくても問題は無いのだが、刺激が欲しかったので

やってみた。
「っよっと。コルタナ、スコアは？」
「９．９７ｃｍってところね。ブースターの起動が遅かったんじゃない？」
それからは授業も進み、放課後になった。すかさず、即行で食堂に連行された訳だが…、
「霞君のクラス代表就任、おめでとーー！！」
パーティーに参加、つか主役だった。それにしても、目の前のお菓子類、どっから仕入れてきたんだ？俺は、そっちの方が気になるんだが。
「はいはーい！新聞部２年の黛薫子です。インタビューに来ましたー！」
「豪く、テンションの高い子ね。」
「おぉ！コルタナさんじゃないですか！？インタビューよろしい？」
「機密事項が沢山あるけど、それでも良いかしら？」
「うん。捏造のしがいがあるよ。後でコルタナさんに聞くとして、霞一夏クン。クラス代表への意気込みをどうぞ！」
ずいっと、ボイスレコーダーを向けられる。とういか、今、問題発言が聞こえたんだが。
「あー、ゴホン。俺は面倒が嫌いだが、言わせてもらおう。」
一旦言葉を切る。すると、騒がしかった食堂が一気に静まり返る。…、これ以外思いつかねぇよ。
「俺の実力を証明してやる！！よく見ておくんだな！！……、こんなんでどうでしょう？」
「う～ん！その自信満々な台詞に、痺れる憧れるぅ！」
大反響だったようだ。正直、引かれると思っていたのだがな。受け容れられたのなら、それで良いさ。
「次、コルタナさん。ズバリ、霞君との関係は？」
絶対、いつか聞かれると思ってた。色々と、公衆の面前で喋ってたからな。当然だわな。

「一夏のパートナーであり、友人であり、家族であり、恋人であり、守護霊でもある、ただの高性能ＡＩよ。」
「一つ追加だ。俺にとって、何よりも優先される存在だ。な？」
「えぇ。」
この場にいる、女子は確信した。自分達がどう頑張っても、二人の間には割り込むことは出来ないと。
「……、そっか。告ぎ、セシリアさん。クラス代表を辞退した理由をどうぞ。」
「あー、コホン。何故、辞退したのかといいますと、…」
「あぁ、やっぱりいいや。長そうだから、適当に捏造しておく。」
「え！？ちょっ……！？」
こんな奴が、いて良いのか。新聞部。
「セシリアさんと霞君の写真撮るからこっち向いてー。」
「あぁ。」
「……、んじゃ撮るよ～。３５×５１÷２４は？」
「「７４．３７５」」
「正解！」
パシャッ
結局、食堂にいた全員が写真に収まっていた。クラスの思い出、とか言っているが果たしてそうなのだろうか？ただ、写りたかっただけ、とかありそうだ。
少年は安堵し、少女は疑惑の淵に佇む。幸か不幸か、それに気づいた者はいない。

第９話　翳が　来たる…（前書き）

英文に自信が無い…。アクセス３００００件、ありがとうございます。
今週から、冬休みなので１２月中には翳シリーズ、全部うｐしたい。

第9話　翳が　来たる…

クラス代表に就任して漸く、寮の手配が出来たようだ。すぐに、下士官トリオの二人に頼んで、東方支部の俺の自室にあるものを定位リバース・コンバートで送ってもらうように言った。本来の目的と違うが、要はばれなきゃ良いわけで…

「だからって、こんなことになるって、誰が予想してよ。」

「まぁ、当然の結果ね。」

俺の荷物が入ったダンボールに、怨嗟の言葉が書かれていた。送って来た奴等に、白虹騎士団式訓練メニューをやらせようかな。どれだけ耐えられるのか、見物だな。

ということがあった日の、翌日。教室にて。

「ねぇ、知ってる？」

「知らん。」

「今日、転校生が来るんだってさ～。２組に。」

「私を、危ぶんでのことかしら。」

「「それは無い。」」

腰に手を当てて、物を言うのは様になっているが、多分、相手もそんなっこと思ってはいないと思うので、俺とコルタナで突っ込んどいた。つーか、いつの間にかのほほんさん達三人組＋セシリア＋箒が、俺の周りに集まってきたんだが。どうして、こうなった？

「クラス代表戦、大丈夫だと思うけど、頑張ってね！」

「主に私達のために。」

「デザート、半年間、…パス、ジュル。」

「おい、最後のなんだ？最後の。」

引くわっ！ガチで引くわっ！とりあえず、教壇の前に立つ。全員の注目を集めることになるが、こんなん、ＭＡＲＺや白虹騎士団で慣れてしまった。なれないと、団長なんてやってらんないからな。

「他の奴がどの程度かは知らんが、誰が相手だろうと賞品が何であ

ろうと、もぎ取ってやる！後は、俺に任せておけ。」
「「イェーイ！！ヒューヒュー！！」」
歓声の嵐。女子とは、これほどまでにうるさいものなのか？（ＭＡＲＺにいたせいで、若干、感性がずれています。）
「専用機持ちは１組と４組だけだから、楽勝だね。」
「その情報、古いよ。」
「誰だ、貴様？」
ドアに寄って、何やらポーズを決めているようだが、はっきり言おう。似合ってない。小さい外見に反して、取っている態度がデカすぎる。釣り合いが、まるで取れていない。一昨日来やがれ。
「２組も専用機持ち、いるから。」
「貴様か…。何の用だ？」
「１年２組鳳鈴音よ。宣戦布告に来たってわけ。悪いけど、勝つのは私よ。」
「成程、ご丁寧にどうも。ならば、見せてみろ。貴様の力を。」
売り言葉に買い言葉、お互いに一触即発の状況だが、予鈴が鳴り鳳鈴音は自分のクラスに戻っていった。その後は、いつも通りの授業をして、放課後。第３アリーナにて。
「セシリア、ＢＴ兵器と通常兵器の同時運用訓練。箒は、この前言ったことを踏まえながら積極的に回避していけ。」
「分かりましたわ。／分かった。」
「では、３分間。ＧＥＴ　ＲＥＡＤＹ！」
セシリアと箒の訓練に付き合ってから、３日が経つ。着実に実力が着いてきているが、どうも経験が両者とも無いに等しい。まぁ、セシリアの方は実験漬けだったからだし、箒の方はＩＳ自体に初めて触ったから、当然なんだが。本当なら、俺がやるべきなんだろうが、俺は手加減が出来ないから、話にならない。訓練機なんて、瞬殺もいいところだし。もう、いかん！そいつには手を出すな！状態。本当に、有難うございました。
「コルタナ？あれって、シャドウになりかけてないか？」

「ちょっと待って、…、シャドウ汚染率１５％よ。」
「って、なるんかい！！セシリア！急速離脱しろ！死ぬぞ！！！」
打鉄が、箒が、シャドウになってしまった。ＩＳはシャドウにならないはずなのに、何故？否、疑問は後回しだ。今は、目の前の箒を一刻も早く、救出しなければ…。
「コルタナ、打鉄のＥＮ残量は！？」
コルタナに聞きつつ、テムジン展開。離脱中だった、ブルーティアーズとの間に割って入る。
「残り、２５６ってとこね。それよりも、速く！！」
「っ、言われなくてもぉぉ！！リミッターリリース！！」
兵器として開発されたこのＩＳは、その性能ゆえに性能の大半を封印していた。リミッター解除すると、現行のどのＩＳをも凌ぐまさしく最強の兵器に早替わりする。
近接ブレードとスライプナーが、幾度も交差し、離れていく。ビームを連射するも、悉く、回避される。
「っち、きりがない。アレを使うか。」
「単一能力発動、始動キー、音声入力＞Ｔｈｅ　ｌａｗ　ｏｆ　ｃａｕｓａｔｉｏｎ　ｃｏｎｔｒｏｌ．＜因果制御発動。」
＜単一能力：因果制御発動中。変更事項を入力。＞
「変更事項、入力開始。テムジン７０７Ｊは打鉄を一撃で仕留める。」
＜変更事項、入力終了。変更事項を、有効にします。＞
俺は、この一撃に全てを賭ける。
「くたばれぇ！くそったれシャドウ！！！！！」
スライプナーでの特攻。シャドウは、避けられなかったようで、見事打鉄は機能停止。箒も、救出完了。ただし、シャドウ汚染患者になってしまったが。

第9話　翳が　来たる…（後書き）

後書き
霞「…。」
ベ「…。（頭をナデナデ。）」
エ「…。」
うｐ主、ｏｒｚ状態。
霞「何か、言い残すことは？」
こんなのって、ないｙっ
エ「あいつ、本気だぞ？」
ベ「人間だ。こういうこともあるさ。」
ちょっと、二人とも？何故、私の肩に手を置かれているので？非常に、いたたまれなくなるからやめてぇーー！！
霞「パルヴァライザー５連戦、逝ってこい。」
どっからどうみても、死亡フラグです。ありがとうございました。
んじゃ、後頼んだ。逝ってきまーす。
エ「ところでうｐ主の実力、どれ程のものなんだ？」
ベ「気になるのか、エヴァンジェ？」
エ「まぁな。気になりもするさ。」
霞「リンクスとしては非常に腕が立つ。といっても、銀翁に苦戦していたがな。」
エ「レイヴンとしては？」
霞「粗製だ。」
エ「そうか。いつか、戦ってみたいものだ。」
ベ「そろそろ、次予告するぞ？」
霞「そんな、時間か。ベルリオーズがやってくれ。」
ベ「了解。次回、天才の妹。それは同時に、天才に対する人質にでもあった。箒を否が応でも手放したくない学園と、一夏の間に、箒に対しコード：議定書が認証される。コード：議定書、それは国際

的な廃人認証にも等しかった。次回、第１０話　翳を　倒し…　お楽しみに。」

第１０話　翳を　倒し・・・（前書き）

アーマードコアラストレイヴン、やっと終わった。隊長ルートが怖くていけない、うｐ主。

！注意！

ここから、原作乖離が本格的に始まります。嫌いな人は、きのこ先生でパルヴァライザーの飛行タイプを相手にするか、霊帝ケイサル・エフェスにボロットで突撃かまして来て下さい。

第１０話　翳を　倒し・・・

シャドウを何とか撃破し、箒を一応保健室に連れ込んだ後、セシリアに当分の間はこのことについて口止めした。職員室に向かう途中に、コルタナにＭＡＲＺと白虹騎士団に事の次第を報告してもらっていた。

「何？シャドウ出現率は０じゃなかったのか？ここは？」

教頭らしき人からの、かなり現状を理解していない質問。いや、この星に真に安全な地帯なんて、ないから。その辺、ちゃんと理解しておいてほしいもんだ。

「いえ。自分は、シャドウ出現率が低いと言っただけで、０とは言っていません。この件はＭＡＲＺの管轄となるので、速やかに篠之乃箒と打鉄を引き渡して下さい。貴方方も、これ以上の被害を出すのは御免でしょう？」

「な、何だと！？そんな要求認め「これは、ＭＡＲＺの管轄だと言った。それに、我々は国家ではないのでな。強硬手段も辞さないが？」っく。」

全く、篠之乃束に対する人質が欲しいのと、ＩＳというおもちゃが欲しいだけかよ。事情を説明してこうなんだから、勘弁してほしいぜ、全く。それにしても、俺って交渉事なんて、嫌いなんだけど。基本、頼み込むかゴリ押しか脅すくらいしか、出来ないんだけどな～。どうにかしたいもんだ。

「…、勝手にしろ。」

「貴方が良識のある人で、こっちも嬉しいですよ。それと、織斑先生。しばらく休みます。」

「あ、あぁ。…、篠之乃を頼む。」

「最大限、善処はしますよ。では、失礼します。」

職員室を出て、携帯からクリアリアに繋ぐ。ワンコールで出た。

「クリアリア、状況の報告を。」

「はい。既に輸送ヘリがそちらに向かっています。１０分ほどで到着予定です。」
「当局は？」
「ＭＡＲＺ当局は、篠之乃箒にコード：議定書を認証しました。」
「ということは、フレッシュ・リフォー直行か。お前は、ここ最近のシャドウとの交戦記録を調べてくれ。」
「了解。」
ブチリ
携帯を切り、会話を終了。ＩＳ整備室に行き、問題の打鉄を運び出す。一応、ＩＳを展開して運び出したから、かなり悪目立ちしてしまった。…、本当ここの人間は何も知らな過ぎる。もっと、細かいことまで注目しようぜ？え？お前が言うな？何のことだがさっぱりだ。
ヘリポートに着き、輸送ヘリを待つ間打鉄の簡易チェック。…、何で？シャドウ汚染率が、限りなく０に近いんだけど。どーゆーこと？これ、どういうこと？
「騎士団長、白虹騎士団第二騎士団全三名、到着しました。」
「分かった。一人は俺とストレッチャー持って、篠之乃箒のところに。残りは、打鉄に封印処理をしヘリに乗せろ。」
「「「Ｙｅｓ　ｓｉｒ！」」」
ＩＳを解除し、箒のいる保健室まで行く。箒、深刻化していないといいんだが。
「箒、聞こえるか？」
「……。」
保健室のベッドで横たわる箒は、瞳に光がなく、虚ろで反応が無い。辛うじて、呼吸はしているみたいだが、精神が拡散して自我崩壊が起こっているのか？拙いな、レベル９じゃねぇか。
「いいか、箒。今からヘリでＭＡＲＺ所有の医療プラントに搬送する。そこで、治療してもらうんだ。必ず、今と変わらない生活がまた、出来るようになるからな。」

箒の手を握り、語りかける。絶対、なんて保障は無いが、フレッシュ・リフォーでのシャドウ汚染患者の回復率は、６～８割程度。それでも、何らかの後遺症は残ってしまう。仕方ないが、生きているだけマシ、と思ってもらうしかない後遺症を持つ患者もいる。だが、これでも極めて高い回復率である。偏に、リリン・プラジナーのおかげである。彼女は間違い無く、天才だ。俺も認める、な。

「…い…ち…か…。」

「箒…。ストレッチャーに乗せるぞ。…、輸送ヘリに移送する。」

箒をストレッチャーに乗せ、ヘリへ。一刻も速く、搬送しなければ。そんな思いが渦巻いていた。輸送ヘリは最後に俺と箒、第二騎士団の一人を乗せると、フレッシュ・リフォーに急行した。

「一夏、コード：議定書、認証されたわね。」

「あぁ。最悪だな。」

「日本政府は隠したがっているみたいだけど、無理ね。」

「だろうな。」

「一夏、辛いわね。」

「…、コルタナＭＡＲＺとフレッシュ・リフォーのセキュリティーを強化してくれ。何が何でも、篠之乃束にこのことを知られるな。」

「了解。」

フレッシュ・リフォーに着く間、ずっと、箒のてを握っていた。…、油断していた。今回は、絶対、シャドウが出ないものと思っていたから油断し切っていた。

「…、俺の、俺の、ミスだ。……。」

一夏は絞り出す様に、そう言った。今回ばかりは、一夏のせいじゃないのに。フレッシュ・リフォーに着き、一人処置室の前に佇む一夏を背中から抱きしめた。

翳、それは己自身。己の暗い部分、抑圧されていた自分自身。翳は、すぐそこまで来ていた。

第１０話　翳を　倒し・・・（後書き）

後書き
霞「ついに、うｐ主の奴が箒専用パワードスーツを決めたそうだ。」
べ「かなりどれにするかで、迷っていたな。」
エ「優柔不断、ということなのだろう。」
べ「なんせ、意見が出る度、あれもこれもと、右往左往していたぐらいだしな。」
霞「それで、何かは知らんがＭＡＲＺに入れる原作ヒロインを増やしたぐらいだしな。」
エ「まぁ、いいんじゃないのか？優秀な部下が増えることは、上官にとって実に喜ばしいことだ。」
霞「実体験か？」
エ「じゃなければ、言わんよ。」
べ「アンケートの結果は、年明けの一発目に発表するらしい。どれになるのか、追加されたＭＡＲＺに入るヒロインは誰なのか、楽しみに待っていてくれ。」
ふぃ～、帰ったよ～。
霞「以外に、速かったな。もう少し、掛かると思っていたが。」
そりゃ、ノーマルならね。
べ「ネクストでやったのか？」
勿論。制限無かったし、文句無いでしょ？
霞「因みに何を使った？」
ノブリス・オブリージュ（ＡＣｆａ版）だけど。
べ「…、勝つわけだ。」
霞「全く、まぁいい。エヴァンジェ、次予告頼む。」
エ「了解した。次回、フレッシュ・リフォーから、ＭＡＲＺ東方支部に帰ってきた一夏にとんでもない情報がハッター准将の口から語られる。一夏はこれに頭を抱え、同時に疑問も解決する。それに、

とある人物が一夏と話したい、といってきた。次回、第１１話　翳を　知り…　お楽しみに。」

第１１話　翳を　知り…（前書き）

誤字修正１月１０日

第１１話　翳を　知り…

ＭＡＲＺ所有の医療プラント通称「フレッシュ・リフォー」に箒を搬送し、俺達はＭＡＲＺ東方支部に戻ってきた。自室で、ＩＳ学園制服からＭＡＲＺの制服に着替え、ハッター准将の執務室へ。

コンコン

「Ｗｈａｔ' ｓ？」

「霞一夏少尉、報告に参りました。」

「ＯＫ．Ｃｏｍｅ　ｈｅｒｅ！」

バタンッ

「失礼します。ハッター准将、霞一夏少尉、只今戻りました。」

「おかえりと言いたいところだが、シャドウの報告を頼む。」

かつかつと、ハッター准将の前に行き、報告をする。

「はい。１７：３０にＩＳ学園第３アリーナにて突如シャドウ化したＩＳと交戦。これを撃破。篠之乃箒一命が、シャドウ汚染患者となり、コード：議定書に従い、フレッシュ・リフォーに搬送しました。」

「ＩＳの方は？」

「はい、第７プラントにて現在、原因の調査中ですがおそらく、後数日掛かるかと。」

「そうか…。まさか、ＩＳがシャドウになるなんてな。当局も、大慌てだろうな。」

「当局から何か、情報は？」

「あぁ、多分、これが一番の原因じゃないか？」

ハッター准将に渡された、ファイル。何々？……、これが原因かよっ！！

「亡国機業、やってくれる。」

「こんなことがあったんじゃ、あれも納得ね。かなり、腑に落ちないけど。」

「まぁ、そういうことだ。こちらで確保したのが、五人とＩＳ１機のみ。彼らの話じゃ、全員で六十五人にＩＳ５機。」
「アフリカに、何の装備もなしに入っていったら、このざまですか。ミイラ取りがミイラになったか。」
「ミイラより質が悪い。なんてったて、シャドウがＩＳだからな。むしろ、あの環境の中でよく、ＩＳを展開させて挙句動かせたもんだ。」
普通は、無理だ。大体、アースクリスタルの電子干渉で、影響圏に入った時点で電子対策してない機械類はおしゃかになるってのに。一体、どんな裏技使ったんだ？
兎も角、亡国機業の強奪したＩＳか。亡国機業め、厄介な真似を…。奴らの尻拭いとは気が乗らないが、これも仕事なんでな。きっちりやるさ。このようなことになったことを、後悔させてやる。
「ハッター准将、この件、白虹騎士団が担当します。」
「言うと思ってたぜ、一夏。」
ハッター准将は、クルリと椅子を回転させ、俺に背を向けた。
「これは独り言だが、亡国機業所有のＩＳの中でアラクネだけが、未だアフリカで活動中らしい。」
「！！失礼しました。」
バタンッ！
「ちょっと、あからさま過ぎたか？…、やはり、一夏はあの二人の子供ですね。行動がそっくりだ…。」
誰もいなくなり、一人になった執務室で呟く。今は亡き、あの二人に良く似ている。
廊下を歩きながら、コルタナを通して騎士団の各部署に指示を飛ばす。次から次へと、テキパキやりつつ自分の仕事もやる。これぞ、休みの無いＭＡＲＺで身に着けたスキルの一つだ。…、こんなスキルなんてあっても、そんなにいらないが。
「一夏、確保した五人の内一人が貴方と話したいそうよ。」
「ふ～ん、繋いでくれ。」

「了解。」
自室のパソコンから、拘置所のディスプレイに繋ぐ。拘置所のディスプレイは、受信専用でハッキングなんてましてやクラッキングも出来ない、特別製。すごいね、ＭＡＲＺの変態技術者達。もっとマシなものを、作ってください。その、日常的に。（どんなものを作っているのかは、皆様のご想像にお任せします。）
「貴様か？俺と話がしたいと言ったのは。」
「そうよ。私は、スコール。貴方に話したいことがあるの。」
「何だ？」
「あの子、エムだけは、どうか減刑してあげてちょうだい。」
「余程、そいつに入れ込んでいるな。何故だ？」
「エムは、戦う為に造られた。任務を効率良く遂行する為に、造られた存在だから。」
「デザインベイビーか。俺の管轄外だ。どうなっても知らんぞ。」
「そう…。あと、もう一つ。」
「？」
「亡国機業を、甘く見ない方がいいわ。」
「覚えておこう。」
接続を切り、天井を見上げる。どうやら、俺の成すべきことは増えていく一方らしい。まぁ、これが俺の出した答えだから、文句も何も言えないんだけどな～。それに、ここに入って初めて、やりがいがあると思ったし。…、あれ？俺って、ワーカーホリック？
「兎にも角にも、ちゃっちゃと書類を片付けますか。」
パソコンの方をコルタナに任せて、俺は書類にサインしていく。そして、気づいたら食堂が閉まっている時間だった。
「食いっぱぐれた…。」
現在ＰＭ２２：０７で、食堂は完全に閉まってます。本当にありがとうございました。キュクー、と情け無い音が鳴る。仕方ないので、自販で何か買うか。そう思い部屋を出たら、拉致られましたー。下士官トリオの一人、この前テムジンと戦ったアファームドＴＴの中

の人、「クレスト・クレストファー」に。因みに、ヘタレで突撃馬鹿。体力馬鹿。こいつに白兵戦訓練で、勝てた例がない。
で、拉致された先はなんと、食堂だった。
「どうせ一夏のことだから、こうなると思っていてけどな。」
目の前に、おにぎりの山が。
「見よう見真似で作ったが、味は保障する。腹に入れておけ。」
遠慮無く、食ったよ。美味かった。おにぎりを作った人、「フレッド・ミラージュレイジ」料理できる、狙撃が得意、性格容姿共にイケメンと、三拍子揃った優良物件。ただし、彼女いない＝年齢の可哀相な奴。なんか、あるらしい。知らんけど。
「フレッド、お前、料理人になった方が良くないか？」

第１２話　翳を　追い…（前書き）

翳シリーズもあと一話。明日で年内最後の投稿になります。
アクセス４００００件、ありがとうございます。
それにしても、ＡＣｆａの虐殺るーと、鬼畜じゃねぇ？古王、タヒるの速すぎワロタ。

第１２話　翳を　追い…

翌日から東方支部は慌ただしく動き、既にいくつかの捜査班が世界各地に出撃した。これは東方支部に限らず、ＭＡＲＺ全体が一気に動き出しており、さながら、ＭＡＲＺ対亡国機業の全面戦争のような様相を呈している。それに各国主にＩＳを強奪された国々も同じようで、ＭＡＲＺに協力体制を取っている。この分だと、今年中に亡国機業の組織の大半は機能しなくなるだろう。そこから一気に、組織の瓦解まで追い詰められれば、こちらとしても今後の憂いが断てるのだが。そう上手くはいくまい。

「で、これがこれでこうなって…。あれがこうだから、あー！！これ違う！！だー、面倒臭い！！！」

「身も蓋も無いこと言わないの。私も手伝ってるでしょ？」

「感謝してます、コルタナさん。」

情報が来るのは良いとして、全て照合するのが、果てしなく面倒だったりする。しかし、情報部のミスで敵が多いとかヤガランデがいましたとか、洒落にならんのできっちりやる。一回、情報部のミスでシャドウ五体と戦闘する羽目になったのは、今でもトラウマです。ミルトン四連戦の方がまだ、可愛いと思えたね。あれは。死ぬかと思ったぜ。あー、ガクブルガクブル。

閑話休題。

ともあれ、亡国機業のアラクネの消息が掴めたので、定位リバース・コンバートで一気にアフリカ「アース・オブ・スフィア」に突入した。スフィア内では、ＩＳはおろかＶクリスタルの電子干渉作用で、機械類は即おじゃん。ただし、電子干渉防護機能を付けた機械類や、パワードスーツは問題無く稼働中。技術だけなら、間違い無く確実に世界でトップだと思う。確か、やろうと思えばパワードスーツで、宇宙に行けたんじゃなかったかな？まぁ、そんな感じだ。ＭＡＲＺパネェ。

「各隊、索敵強襲。目標は、ポイントＢ－１からＣ－３までを、巡回している。対シャドウ用隔離ネットを指定ポイントに仕掛けておくのを忘れるな。」
「「「了解。」」」
「では、作戦開始！」
第一、第二、第七騎士団が散開し索敵しつつ、罠を張る。これは対シャドウ戦の鉄則で、こうやってシャドウを限定領域に隔離しその中で戦闘することで、周囲の被害を減らすことが出来る。こうでもしないと、まともに戦えないのが、現状ではあるがな。人の言葉を解さん獣に、人の常識は通じないらしいからな。しかも今回、シャドウがＩＳだから余計に、強力になっている。全く以って、面倒な。
「こちら、第二。団長、目標を確認した。シャドウ汚染率、６７％汚染率、更に上昇中。援軍を要請する。」
「だ、そうだ。聞いたな？可能な限り速く第二と合流しろ！！」
「「「了解！！」」」
「一夏、ＩＳには絶対防御があるのよ。どうするつもり？」
「チマチマ削って、デカイのを叩き込むしかないだろう。」
「ゴリ押しが効く相手じゃないのよ？分かってる？」
「それ以外に、どの道策はないっ！」
スラスターを全開にし、ダッシュで急行。…、間に合えよ。僚機も追いついてきた。第七は速くも第二と合流したらしく、援護射撃を始めていた。数ではこちらが有利、力ではあちらが有利か。ＩＳ相手にどこまで持ち堪えられるか、正直微妙だ。しかし、誰一人として、部下を死なすつもりは毛頭ない。
「一夏！第二騎士団全機、搦坐！第七騎士団も、もう持たないわっ！！」
「いくらなんでも、速すぎだっ！！！３分も経ってないじゃないか！第七騎士団！第二連れて撤退しろ！！」
「し、しかし！」
「いいから、さっさとしろ！索敵用の装備じゃ、まともに戦えんだ

ろうが！！！」
「りょ、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！？？？？？」
「おい！？おい！！？？返事をしろーーーー！！！！？？？？」
「第七騎士団、擱坐。一夏！！」
守れなかった・・・。自分の部下を、守れなかった。コンソトールに、拳を叩き付けた。
「一夏、悔やむのは後よ。レーダーを広域索敵に切り替えたわ。目標は依然健在。ポイントＢ－７
から動いてないわ。やるなら今よ。」
「分かった。各機、気を引き締めろ。相手は、容赦無いぞ。」
「大丈夫です。後ろはお任せください。」
「そうですよ。団長、頑張りましょうや。」
「……、無論…。」
「負ける気がしません。」
「お前ら…。全く。」
「一夏、目標視認。いつでもどうぞ。」
「こるたな、サポート頼む。全機、目標を撃破しろ！撃て撃て撃てえええええ！！！！！」
五機のテムジン７４７Ｔｙｐｅａ８のスライプナーが火を吹く。ニュートラルランチャーが、ビームが、パワーボムが、剣技が次々とアラクネに叩き込まれていく。しかし、敵もそんなに甘くない。あるものは避け、あるものは受け流し、多脚を使い反撃してくる。こちらも、回避優先で攻撃していく。
「って！アラクネって、ＥＮなのかよ！？実弾じゃなかったのかよ！？」
「大方、強奪した後に亡国機業で強化改修されたのでしょうね。いくらＶアーマーでも、連発で受けたらまずいわ。」
「つまり、プランＡ。変更なし。シールドエネルギーの方は？」
っと、セーフセーフ。アラクネの遠距離攻撃が掠りそうになった。機動さえ読めれば、回避なんて簡単だ。だが今のは、ギリギリだっ

た。肝が冷えるぞ。…、あまりこういうギリギリの状態って、好きじゃないんだよな～。
「予測では、とっくに枯渇してるはずよ。」
「それを、ったく黙れ！先に言、足掻くな！！えっての！運命を受け入れろぉ！！！！！」
最後に俺が、アラクネにスライプナーを突き立て、停止。操縦者ごと、コアを破壊した。
報告
撃墜数　１
負傷者　１０名
大破　３機
中破　４機
修復不可　３機
修理及び整備費用　９０００万円
報告者：霞一夏少尉

第12話　翳を　追い…（後書き）

後書き
べ「明日か。」
明日で年内最後の投稿だね。休んでいる内に、とっととプロットでも書いてるから、夫婦でどっか行けば？
霞「どこにだ？」
え？ハワイ？
霞「ありきたり過ぎる。却下。」
んじゃ、イギリス。
霞「飯が不味い。却下。」
えー。ドイツ。
霞「…、随分とマイナーだな。でも、丁度いいか。」
お土産、よろしくな～（'ω'）
べ「盛り上がっているところ悪いが、私達に実体は無いぞ？」
霞「……。」
（・―・）
べ「何だ？その、今知った衝撃の事実みたいな表情は？」
…、無知とはげに恐ろしきかな。
霞「…、気を取り直すぞ。エヴァンジェはどうした？」
べ「さぁ。」
残念、エヴァンジェの冒険はここで終わってしまった。
霞・べ「勝手に殺すな。」
いやん。嘘だよ。嘘。なんか、アライアンスにバーテックスから襲撃予告があったみたいで、そっちに行ってるよ～。年の瀬だってのに、キリキリやらかすね～。
霞「まぁ、連中など、そんなものさ。大体、こうしてのんびりしている方が、珍しいくらいだからな。」
べ「そもそも、私達に日付感覚など、ないからな。」

まぁ、年がら年中ドンパチやってたら、そうもなるよね～。納得。
と言う訳で、姐御、次予告。
霞「あぁ。次回、辛くもシャドウＩＳに勝利した一夏。その後、フレッシュ・リフォーにて箒の容態を聞く。それは、一夏の想像以上に厄介なことになっていた。次回第１３話　翳の　爪痕…　お楽しみに。」

第１３話　翳の　爪痕…（前書き）

フロム脳を駆使しまっくたら、リリンが本家のものと豪いかけ離れた人になってしまった。リリンのファンの方々、申し訳ありません。それと、これが年内最後の投稿になります。

第１３話　翳の　爪痕…

シャドウ戦の時の必勝法は、三つある。一つ、開戦速攻で片付けること。二つ、Ｖコンバーターを破壊すること。三つ、弱ったところに最大威力の攻撃を叩き込むこと。ただ、三つ目はかなりリスキーで、普通は前の二つのいずれかを行うのが、ＭＡＲＺ内での常識だ。まぁ、今回は相手がＩＳだったから、弱ったところに最大威力の攻撃を叩き込む戦法を取ったんだが…。

「ものの見事に、オーバーキルね。イチカ、少しは手加減してあげたら？」

「俺の辞書には、そんな言葉は載ってねぇよ。それより、箒の容態は？リリン？」

「あまり、芳しくないわね。ファイユーヴの話だと、起きるのを拒否してるそうよ。余程、心が荒んでいたのね。篠之乃さん、よく今まで耐えたわ。」

「姉の発明で、一家離散。政府の要人保護プログラムで、一ヵ所に住み続けられない。挙句、監視と尋問紛いの事情聴取だろ？こりゃあ、心も荒むわな。」

フレッシュ・リフォーの所長リリン・プラジナーの所長室。ソファーにドッカリと腰をかけている一夏。リリンは、見るからにお高そうな椅子に座って、コーヒー飲んでる。因みに、コルタナも実体化して俺の隣に座っている。

「優秀すぎる姉を持つ、というのも考え物ね。」

「そして、その優秀すぎる姉は、平凡な下のことを考えてくれないから、こっちが根を上げてしまう。まぁ、天才が平凡のことを知らないように、平凡も天才のことを知らないけどな。主に、篠之乃博士とか。」

「イチカ、それ、私に対する嫌味？」

「平凡を知っていてくれる天才は、嫌いじゃない。誤解したなら謝

るよ。リリン、すまなかった。」
即座に謝る俺。コーヒー片手に、今回のシャドウＩＳとの戦闘記録を見ていた俺達。オーバーキルになっていたのは、否定しないが。これが、普通のシャドウなら状況の幾分違っていたのだけどな～。しかし、相手がＩＳとなると、話が違ってくるわけで…。十五対一の戦力差をもろともしない戦闘能力の高さには、絶望を通り越し、感動を覚えたほど。ともあれ、これでＩＳも例外なくシャドウになることが、ＭＡＲＺのみならず世界各国が知ることとなった。
「…、いいわ。イチカ、篠之乃博士が嫌いだものね。」
「嫌いとかそういうレベルじゃなく、正直関わり合いたくない人物１位、だな。」
「ぅわ～、ご愁傷様だね、篠之乃博士。で、話を戻すけど、ファイユーヴがＣＩＳで篠之乃さんの意識を発見。説得したけど、ボロ負け。」
「理由は？」
「さぁ。」
リリンは肩を竦めてそう言った。「つーか、ＣＩＳに意識あるってどんな状況よ？有り得ないだろ、普通。いやー、もう、ねぇ？このまま、気の済むまでＣＩＳに放置するってんのも、一つの優しさじゃなかろうかと思うんだか。冗談とかじゃなく、本気で。まぁ、ここまで追い詰めた日本政府に慰謝料請求したり、姉の顔をぶん殴るくらいは、箒の心情から考慮するに十分妥当な報ｆ、じゃなくて復ｓｈじゃなくて、御礼参りじゃないかと思うんだ。」
「イチカ、脳内言語洩れてる。洩れてる。」
「報復も復讐も御礼参りも、どれも一緒だと思うけど。」
「…、さいですか。で、意識の方はまぁ、良くないが置いておくとして。体の方はどうなんだ？」
「後３日すれば、最高に健康な状態になるわ。ただし、意識が戻ってこないことにはなんとも…。」
「結局、そこに帰結すんのかよ。…、重てぇな。」

「重すぎでしょ。」
「重いわね。」
俺、リリン、コルタナは揃ってため息を吐く。なんつーか、何故、人様のお家事情で俺達がこんなに重くなんなきゃならんのよ？諸悪の根源は、行方不明で目下捜索中。篠之乃夫妻には存外速く連絡がついたので、一通りの事情を説明し、俺名義でフレッシュ・リフォーで治療していることを伝えた。出来る範囲内で、見舞いにも来るそうだが、正直、政府が許可するとは思えない。
兎に角、この件については一応の決着がついたわけだ。学園二週間も休んじまったがな。仕方ない、勉強よりこっち優先。そもそも現時点で一体どんだけの国が、アラスカ条約をきっちり守ってやがると思っているんだと、と問いたいぐらいには俺にとってどうでもいいことである。それよりも、増えていくばっかりの仕事を如何に捌くかが、俺の重要課題である。最近、階級と労働が釣り合ってないと思うんだが。…、休暇願、出そうかな？
ポスッ　パタン
「リリンー、打鉄ってさ、クリーニングしてからどうすんだ～？くわぁ～。」
「ちょっ、勝手に寝ないでよ！！ったく、私が知るわけないでしょー！！」
「それもそうか。リリン、ソファーちょっと借りるわ。コルタナ、1時間したら、起こしてくれ。じゃあ、おやすみ～。」
イチカの奴、勝手に寝やがった。ここ、私の部屋なんだけど。くかー、とアホ面丸出しで寝てるイチカは、起きてる時からなんか眠そうだった。かなり、疲労も溜まってたんだな～。実働部隊って、何かと忙しそうだし。それに、仕事だけが一方で全然終わる気がしない、って言ってたし。…、仕方ないよね。イチカはあんなだし。私は、何も言うことは出来ないけど。
「コルタナ、ＩＳ学園ってイチカにとって、どんな感じなの？」
「それは本人に、聞くべきじゃないかしら？」

「あの状態で？」
「…、無理ね。そうね～、一夏にとってＩＳ学園はただの箱庭。もしくは牢獄よ。世間から、圧倒的なまでに隔離された、ただの箱。一夏曰く、「人間としてのレベルが総じて低い、学校モドキ」らしいわ。」
「……、イチカも苦労しているのね。」
翳は倒された。しかし、少女の意識は常闇の中に一人、引き籠る。

第１３話　翳の　爪痕…（後書き）

後書き
ちょっと真面目に書きます。
前書きにも書きました通り、これが年内最後の投稿になります。約一ヶ月前からの投稿で、こんなにもたくさんの方々がこんな拙い小説を読んでくれるとは、夢にも思いませんでした。実際、今でも私自身、「え？こんなに読んでる人いるの！？ウソダ！ドンドコドーン！！！」状態です。しかし、ここまで伸びたのは偏に皆さんのおかげです。ありがとうございます。
次回の投稿は、１月４日になると思います。それでは皆さん、良いお年を。

アンケート結果発表及び追加設定集２（前書き）

あけおメルツェェェェル！
と、冗談はここまでにして、新年一発目の投稿です。ネタバレありますが、どうか気にしない方向で。今年もよろしくお願いします。

アンケート結果発表及び追加設定集２

・篠之乃箒の専用パワードスーツ「テムジン・ファイアフライＶｅｒ．箒」
スライプナーを合体方式にし、刀のように扱えるようにした試作兵器「スプリット・スライプナー」装備。後方に大型スカートアーマーを増設。内部は、スラスターになっていて、任意でパージ可能。機体コンセプトは、「その速さを生かし、敵の懐にいち早く接近しこれを撃破。後に、速やかに離脱を可能にする零距離強襲用機体。」要は、さっさと敵に近づいてフルボッコ、で倒したらそのまま逃げる、を可能にした機体。
箒の戦闘スタイルに合わせ、徹底的に格闘戦向けにチューンを施した逸品。テムジンらしからぬピーキーな性能を誇り、アファームド以上の格闘性能の高さを出した。
武装は、「スプリット・スライプナー」のみ。尚、分割していてもビームは撃てる。ただし、まだ試作段階の為特攻技の使用不可や合体時に撃てるニュートラルランチャーの出力が他のテムジンに比べて低いことからも、やや力不足感が否めない。
カラーは、メインに赤、サブに白。左肩にＭＡＲＺのエンブレム。

・シャルロット・デュノア専用パワードスーツ「ライデンＭＡＲＺ仕様Ｓカスタム」
ライデンにこれでもか！！というほど、武装を装備させたもの。通称「アームズヘッジホッグ」と呼称される。
両腕にアファームド用のビームトンファー、右腕にライデンの標準装備のビームランチャー、左腕にサブマシンガン、背中にミサイルコンテナとウェポンラック、肩には極太レーザー発射装置。ウェポンラックには、ショットガン、アサルトライフル、プラズマ兵器（コヴナント共が使ってるアレ）、マチェット等二種類がストックさ

れている。プラズマグレネードは標準装備。
上記の装備により、重量過多で機動力不足のため、機体各所にスラスターを増設、常時ブースト移動。（ＡＣ４系の地面をすべるように移動するアレ。）
兎も角、撃ち負けはせんよ、当たるのであれば。を、地で行く機体。
一夏ですら、コルタナの補助がないとまず、まともに戦闘できない。
カラーは、メインにオレンジ、サブに黒。左肩にＭＡＲＺのエンブレム。

・コード：議定書
本家とはかなり扱いが違うので、よく読んでおいてください。
主に先進国の国防担当大臣たちにより決められた、極秘の議定書。
シャドウ汚染患者の処遇について。
1，フレッシュ・リフォーに収容し治療、及び、治療しても回復の見込みが無い場合の安楽死の承認。
2，場合によっては、患者ごと期待の破壊の許可。
3，２親族以内にシャドウ汚染患者の状況の告知の承認。
4，費用は、シャドウ汚染患者の国籍が一致する国持ち。（例：箒がシャドウ汚染患者でコード：議定書が承認→箒の国籍は日本→日本がフレッシュ・リフォーに治療費全額負担となる。因みに費用は、心臓病で心臓の移植よりも二割ほど高い設定。）
これが承認される＝事実上の廃人同然。生きていようが死んでいようが、世間には公表されず、闇に葬られる道を辿り、仮に社会復帰しても本人には守秘義務が課せられる。
承認権は、ＭＡＲＺの准将以上の階級の最低二人が同意しなければ、認証されない仕組み。
（出展：電脳戦記バーチャロンマーズ　ＨＡＬＯシリーズ　ＡＲＭＯＲＥＤ　ＣＯＲＥシリーズ）

アンケート結果発表及び追加設定集２（後書き）

後書き
新年明けましておめでとうご
霞「ございます。今年も、うｐ主の酔狂な小説を読んでくれると、泣いて喜ぶぞ。うｐ主がな。」
姐御、そりゃないぜ。
霞「何か言ったか？」
イエ、ナンデモアリマセン。
霞「分かってるなら、それでいい。」
そういや、ベルリオーズは依頼？いないけど…
霞「あぁ、そうだな。」
？まぁ、いいや。それより、エヴァンジェはさっきから黙ってるけど、どーしたの？
エ「…え？あぁ、すまない。考え事だ。」
ふ～ん。ならいいや。
霞「そんなことはさておいて、お気に入り５０件突破、及びアクセス数５００００件突破有難う。」
あーー！！今、言おうと思ってたのにぃぃぃ！！
霞「さっさと言わないうｐ主が悪い。」
うぅ。
霞「エヴァンジェ、久しぶりの次予告だ。ぬかるなよ？」
エ「分かった。次回、とうとう嵐が一夏の前に姿を現す。元凶にして幼き頃の尊敬の対象だった、人物。今では、世界を変えた代償から逃げ続けるだけの人物。一夏は果たして、どのような判断を嵐にするのだろうか。次回、第１４話　弾丸の雨ー？　お楽しみに。」

第１４話　弾丸の雨ー？（前書き）

誤字修正1月1日

第１４話　弾丸の雨ー？

とりあえず、シャドウ鎮圧作戦の後始末も終わり、ＩＳ学園に登校した。したんだが…

「コルタナ、すまん。俺は、疲れているらしい。」

「一夏、現実は非情よ。」

普通、地面にウサ耳なんて生えてる訳ないでしょうがーーーー！！！！つか、ご丁寧にも看板に「引っこ抜いてね、いっくん！ｂｙ束さん」なんて、罠に決まってんだろうがーーー！！！！！誰が、引き抜くか！！

「南無、中略、この矢的はずさせ給ふな。」

チャキッ

「一夏、スライプナーで狙いながらそんなこと言わないの。そもそも、この距離で外さないでしょう？」

「…、っち。見なかったことにしよう。って、向こうから来やがったし。」

天才の考えることは、凡人である俺には理解し難い。つか、出来ない。いきなり、にんじん型のミサイルとか、どこぞの黄金勇者だよ。いや、マジねぇわ。

「いっくーーーーん！！会いたかったよぉぉぉぉーー！！！！！」

ヒョイッ、チャキッ

「何をしに現れた？ここは、ただのテロリストが来るべき場所ではない。」

「い、いっくん？何を言ってるのかな？これ、何かな？」

「…、理解出来んと見える。ならば教えてやろう。貴様の罪状をな！！」

一夏、相当頭に来てるわね。だって、口調が普段と全然違うもの。

一夏って、不機嫌になると人が変わったようにくだけた口調から、一気に高圧的で人を見下したような口調に変わる癖がある。声のト

ーンも若干、低くなる。この部分は、父親に似たのかしら？記録の上でしか知らないけれど。
「白騎士事件でのミサイル基地のハッキング、ドイツ軍のデータベースへの無断アクセス及びデータの破壊、更にＭＡＲＺのネットワークＲＮＡへのハッキング行為。その他諸々の犯罪行為、およそ数百。知らんとは、言わせんぞ？自由人気取りもここまでだ。貴様には水底が似合いだ。」
「な、なんで？いっくん、そんな、こ、とまで…。」
いっくんの目は、こんな怖くはなかった。もっと、優しかった。いっくんの顔は、こんな無表情じゃなかった。もっと、笑っていた。いっくんの言葉は、こんな冷たくはなかった。もっと、温かかった。どう、して…？どうして、どうして、どうして、どうして、どうして、どうして、どうして、どうしてぇぇぇぇぇぇ！！！！！？？？？いっくんは！？いっくんは！？どうして、そんな風になっちゃったの！！？？どうしっちゃたの！？
「一夏。」
全身青くて、ちーちゃんやほーちゃんより綺麗な人が、いっくんの後ろから抱き着いててた。いっくんは女の人を見て、私に向けていた武器をしまった。その表情は、どことなく怖かった。
「…、警告だ。二度と俺の前に姿を現すな。次は無い。」
俺は今、篠之乃束にスライプナーを向けていた。正直、ここまで罪悪感が無いとは思ってもいなかったが。ここでこいつを殺せば、俺の計画に邪魔立てする奴はいなくなるが、同時に俺の計画が破綻し、俺の立場が悪くなる。頭で分かっていながらも体が言うことを聞かないのは、多分、抑えきれなかった感情の暴走。
「一夏。」
コルタナが実体化し、後ろから抱き着いてきた。さりげなく、スライプナーを量子変換して、しまっていた。それで、俺は正気に戻り、警告して学校に入った。

学校、それも校長室に行き事情（篠之乃束に会ったことは、勿論伏せて。）話し、他のいくつかの情報も渡した。それから、教室に戻り授業を受けた。やはり、クラスの女子からの視線が痛かった。
そして、休み時間。
「いっちー、おかえり～。心配してたんだよ～。」
「あぁ、今戻った。…、で、聞きたいこと、あるんだろう？」
「えーとね、「箒さんは、どうなりましたの！？」セッシー…。」
成程、そこだろうと思っていた。しかし、コード：議定書のせいで全部話すわけにもいかないからな。所々ぼかして、って言ってもいいか。いずれ全てを知るなら、早いほうがいいしな。
「箒は、フレッシュ・リフォーで現在治療中だ。」
「良かった…。」
「ただ、後遺症は残るだろうけどな。」
「え？そんなに酷いのですの！？」
「植物状態だ。今の箒は。」
でも、シャドウ汚染患者の中でも、比較的中度の症状なんだがな。ＣＩＳに意識がある、ってことを除けばの話だが。しかし、あの引き篭もりをどうにかしないとな～。いつまでも、あの状態じゃいかんだろうし。かといって、箒の問題だから簡単に首も突っ込めんし…。どうしたものか。
「とりあえず、俺が言えるのはそれだけだ。そろそろ、授業だぜ？皆の衆。」
時計を見て、慌てて席に着く女子達。こりゃ、次の休み時間も無いものと考えた方がいいな。ＧＯＯＤ　ＢＹＥ．俺の休み時間。
「（一夏、ファイユーヴから通信よ。）」
「（繋げてくれ。）」
「（いっちかーーー！久しぶりーーー！！！）」
「（…、やっぱ切るか。）」
「（ちょっと、いきなりそれはないんじゃないの？真面目な話よ。）

」
目がスッーーーと細まる。ついでに、眉間にしわも寄せて。タイミングも、山田先生が女子にしか分からない単語を言ったばかりで、誰から見ても「俺、分かりません。」としか思えない表情になっていた。本当は、「んな時に通信してくんな、この野郎。しかも、真面目の話を授業中にしてくんなボケェ。」を一夏の理性を総動員して、最小限に食い止めた結果であることは、コルタナと本人しか知りえない事実であった。霞一夏は、存外気の短い男である。
「（で、内容は？）」
「（ＩＳ学園に戻りたくない、ＩＳに関わりたくない。そう言ってたわ）」
「（あー、それ、俺じゃなくハッター軍曹に言いなさい。ファイユーヴ君。）」
「（あら？そのハッター准将が一夏少尉に任せるって、言っていたけど？）」
なんつー丸投げの仕方だよ。俺の幼馴染だけどさ。これは、ないんじゃない？え？有り？さいですか。…、本気で休暇願、出そうかな？
少年は嵐に出会い、少女は拒絶する。電子虚数空間の奥深く、それはただただ見守っていた。

第１５話　弾丸の雨ー？

放課後、即行で寮に行き定位リバース・コンバートでＭＡＲＺ東方支部へ行く。そこからまた、定位リバース・コンバートでフレッシュ・リフォーへ。いい加減、この手順も面倒になってきた。どうにか、ならんよな。うん。

で、フレッシュ・リフォー。箒のいる病室。ここには、ＣＩＳ接続端末があり、箒が何時戻ってきてもいいようにと、、リリンが設置したらしい。はっきり言って、助かった。

「コルタナ、ＣＩＳにいる箒とこっちの入力端末を繋げてくれ。」

「了解。」

部屋にあったデスクトップＰＣを起動させ、立ち上げていく。すると、ＣＩＳと繋がり、こちらからも情報が入力できるようになった。と、いうわけでさくっと入力。

「箒、学園に行きたくないのはファイユーヴから聞いた。」

「そうか。」

「学園に行かないのなら、選択肢は３つだ。」

「３つ？」

「１，どっこの研究所のモルモット。

２，このままＣＩＳで過ごしていく。

３，ＭＡＲＺに入隊もしくは保護される。因みに言うと、１と２は漏れなく死亡という二文字が付いてくるが、どうする？」

「…、また、私は監視と拷問をされるのか？」

「お生憎様。ＭＡＲＺは人員不足でね、んなことに人を割ける余裕は今のところない。保護と銘打ってはいるが、実際、ただの雑用係だな。」

仕方ない。ＭＡＲＺの試験はかなり、難しいのだ。それに、Ｖポジティブの高い奴もそんなにいないのが現状。スカウトが、どれだけ

大変なことか。…想像したくないな。そもそも、ＭＡＲＺって民間の知名度がそこそこで、たまに新聞とかに載る程度。大体、かなりの情報統制が敷かれていて、ＭＡＲＺが受け持った事件は一切、民間には公表されない。それ故、人が来ない。各国のリストラされた軍人でも雇えば、少しはマシに、ってこの案良いな。後で、ハッター軍曹に上申してみよう。

「…、一夏、私は、私は…！！」

「ん？」

「…、私も一夏のように強くなれるだろうか…？」

「多分な。俺より筋は良い筈だろ？強くなれるさ。」

「…、一夏、ＭＡＲＺに入隊したい。」

「良いんだな？」

「うむ。」

どうやら、決まったらしい。流されるわけでもなく、自分の意志で決めたことだ。俺は、何も言うつもりはないさ。俺は、直ぐにリリンに連絡し、箒の意識をサルベージするように頼んだ。諸々の手続きの為、支部に帰る間際に一言。

「ようこそ、ＭＡＲＺへ。歓迎しよう。盛大にな。」

そう言い残し、支部に帰った。

「あー、これ、ＩＳ学園と日本政府になんて言えばいいんだ？」

「正直に話すべきでしょう。」

「ですよね～。最も、それで納得する連中とは思えんが。」

「それは、本人からの鶴の一声を頂くとか、権力で黙らせるとか、色々あるでしょ？」

「素晴らしい提案、誠に有難うございます。俺、過労でその内、ぶっ倒れるんじゃねぇ？…、そーいや、もう少しでクラス代表戦か？」

「そうね。さっぱり忘れていたけれど。」

「やっぱり、忘れるよな～。何にもなければ、良いんだが。」

「何かあるでしょ、絶対。一夏のことだわ。トラブルがある方に、

お祈りしておかなくちゃね。」
「そんなモンにお祈りせんで良い。それより、専用機持ちのデータ、よろしく。」
「分かったわ。」
「くわぁ～、寝るわ。おやすみ～。」
「お休み、一夏。」

今まで諸々の書類や手続きの為、点けていたＰＣの電源を切り、ベッドに入り寝た一夏。一夏も大変よね。いくら少尉といへど、アレだけの仕事をいつもやっているのだから。それにこの歳で、白虹騎士団の騎士団長なんて、貴方の方が篠之乃束より余程すごいわよ。人を動かす才能と人望の高さ、それとＶポジティブの圧倒的高さ。これだけハイスペックな人間、そうそういないわ。だからこそ、一夏を選んだのだけれど。
「一夏、知らないでしょう？私が、貴方を選んだの。貴方には人を惹きつける才能があった。それに、貴方自身の能力の高さもね。だから、一夏を選んだのよ。それは決して、間違いではなかった。本当、一夏と組んで正解だったわ。」
一夏の髪を実体化して撫でる。さて、私は私の仕事をしようかしら。Ｖクリスタルの電子干渉作用で、ＩＳ「テムジン７０７Ｊ」からコアネットワークに入り込む。そこから、欲しいＩＳのデータを直接コピーする。一夏のＩＳ「テムジン７０７Ｊ」の協力の下、私は外部からの異物ではなくあくまでも「テムジン７０７Ｊ」として、活動が出来る。
最初、コアに意思があったのは驚きだったけど。しかし、これで女性にしか反応しないのも、十分に納得がいった。だって、ＩＳコアの意思が赤ん坊だったんだもの。これでは、男に反応しないのも頷ける。だって、赤ん坊の世話をするのは何時だって、女性の役目でしょう？つまりはそういうこと。お母さんになれるのは、女性だけ。母性があるのも、女性だけ。そして、ＩＳの意思が欲しているのは

お母さん。これではじき出される答えは、女性。
なんだけど。問題は、何故、男である一夏が動かせたか、ということ。これは憶測だけど、私のせいじゃないかしら。私はＡＩだけど、人格は女性。開発者の脳細胞クローンでもあるわけだし、一応人間としての側面もあるわけだから。そこで、引っ掛かったのかしら？憶測だけど。
「っと、これで終了ね。次は、…。意外に早く見つかったわね。正直、一夏の相手役は務まらないと思うけど。」
中国第三世代ＩＳ「甲龍」のデータをコピー終了し、次に向かう。次のＩＳは直ぐに見つかり、データをコピーする。簡単ね、私にとっては。
Ｖクリスタルに戻り、情報の整理をする。…、中国の代表候補生もたいしたこと無いわね。中近距離の機体を生かしきれてない。というか、本来なら牽制用の射撃武器を主力って、ふざけてるの？機体コンセプトを丸っきり、生かしきれてないわ。これは、研究者泣かせの候補生かしら。
「一夏じゃ無いけど、これは低いわね。この程度で代表候補生？まぁ、実験機の意味合いが強いから、この程度で丁度いいのでしょうけど。」
もう少しマシな人材って、いなかったのかしら？これじゃ、ただの的よ。身内贔屓なのは良く分かっているけど、一夏どころかクリアリアにだって勝てそうにないわね。
旋風、それは全てを巻き込み、台無しにする。それは音も無く近づいていた。

第１５話　弾丸の雨ー？（後書き）

後書き
あー、このパソコン、遅いっ！
エ「なんだ？藪から棒に？」
分かっていたけど、このパソコンもう１０年くらい経つわけよ。
エ「買い替え時、過ぎたんじゃないか？」
で、家族にパソコンに明るい人種がいないのよ。
エ「ふむふむ。」
弱小スペックで、明るい人種が見れば多分…。
エ「多分？」
貧弱、貧弱ぅ！と言うこと間違えなし、なポンコツパソコン。
エ「しかし、ノートＰＣ、アウトレットで買うのだろう？なら、今は我慢するべきじゃないか。」
そのつもりだけど、その前に誰かに買われないかな～。良いやつあったんだけど。買ったら、ＨＡＬＯ２ダウンロードすんだ！ついでにスカイリムも。
エ「まぁ、有りじゃないか？人それぞれだ。」
うん。…、そういえば姐御とベルリオーズは？
エ「あぁ、依頼、だそうだ。霞スミカからの伝言を言付かっている。」
何？
エ「今回は依頼でそっちに行けないから、次予告はうｐ主がしろ。サボったら、分かっているな？だ、そうだ。」
オオゥ、ＹＥＳ．マム！
というわけで、次回、やっとクラス代表戦。一夏ＶＳ鈴音の幕が切って落とされる。我等が一夏、容赦無く攻撃して止めを刺そうとしてた所に、乱入者の陰が！？逃げようにもシールドが下ろされ逃げられないっ！どうする一夏！？次回　第１６話　弾丸の雨ー？　お

楽しみに。

第１６話　弾丸の雨ー？（前書き）

こちら、シューティングスター。戦闘描写がヘタクソ（だとうｐ主はおもう）だから、後は各自のフロム脳に任せたぜ！

推奨脳内ＢＧＭ

ＶＳ鳳鈴音戦「Ｐｒａｎｔｈｅｒ」（ＡＣ４より）

ＶＳ無人機戦「”９”」（ＡＣＭｏＡより）

第１６話　弾丸の雨ー？

クラス代表戦一年一組代表霞一夏ＶＳ一年二組代表鳳鈴音戦の、ちょっと前のこと。

「…、ふ～ん。遠くは衝撃砲、近くは青龍刀か。接近系万能型なのに、遠距離型の戦い方って馬鹿なの？機体コンセプトに全く反した、戦い方だよな～。」

「接近系の万能型なのにね。」

「要は、撃たせなきゃ良いだけの話だろ？速さでは、テムジンの方が上だ。それに、アンロックをいの一番に潰せば良い。」

Ｖクリスタルの電子干渉作用のちょっとした応用、空中ディスプレイ編。しかし、Ｖクリスタルは本当に便利。ただ、かなりリスクが高いのが難点だけど。ちょっとした応用が、応用じゃ利かないくらいの便利さ。ＭＡＲＺのパワードスーツや俺のＩＳ，コルタナでさえ、便利過ぎるほど。まぁ、それで困ることはないんだけどさ。

そして、試合直前。

「（来い、テムジン７０７Ｊ。）」

リバース・コンバートに成功し、ピットに行く。その際にＰＩＣを切り、切った分をスラスターに回す。これで、速度が強化されたはずだ。そもそも、Ｇを感じない、ってこと自体に違和感があったんだよな～。よし、これからＰＩＣによる重力緩和機能は切ろう。そうしよう。

「一夏、全システムクリア。エネルギー、チャージ完了。Ｖコンバーター、異常無し。Ｖアーマーは切っておくわね。」

「おう。…、霞一夏、テムジン７０７Ｊ、出撃する！！」

ピットから出て、空中に躍り出る。スライプナーを甲龍に向け、オープンチャンネルで宣言する。

「言葉を重ねることに、意味は無い。始めよう。この瞬間は、力が

全てだ！！」
「いいわ。先手は貰った！！」
ロックアラート、左にＱＢで回避する。ランチャー連射モードで、右肩のアンロックを攻撃。…、やはり一撃では落ちないか。地道にやるしかないか。後は、細かく動き回り、着実にビームを衝撃砲に当てていく。
「何で！？当たんないの！！？？」
銃身も弾丸も見えないのが、衝撃砲の売りなのに…！！しかも、相手が動き回るから、ロックしても発射が間に合わないじゃない！！＜右肩アンロック、損傷。衝撃砲威力、５０％低下。＜
「なっ、…！これが狙いだったの…？…、いいじゃない。やってやるわよ！！」一気に距離を詰める。あんな長い銃持ってんだから、接近戦なんて出来ないわよね。
「掛かったか。では歓迎しよう、盛大にな。」
全く、思考の誘導に時間が掛かったな。でもまぁ、鈴音が単純思考の持ち主で良かった。おかげで、速く片が着きそうだ。どうせ、接近戦に弱い、そう思い込んでいるのだろう。それは大きなミスティク。確かに、射撃の方が秀でているが、別に接近戦も出来ないとは、言っていない。というかそもそも、テムジンシリーズは全距離対応万能型で、癖が無く扱いやすいのが特徴。弱点となる距離が存在しない為、そうそう他のものに後れを取ることはない。強いて言うならば、万能型ゆえの火力不足くらいか？
「しかし、こうも馬鹿正直に突っ込んでくる奴、いるか？」
呆れた。こいつ、単純馬鹿に違いない。うん、きっとそうだ。パワーボム投げつけ、爆風で視界が霞んでいる隙に、後ろに回り込み、特攻かけた。そして、止めのニュートラル・ランチャーを喰らわせようとした時、外壁を突き破ってくる音が聞こえた。
「なっ！？侵入者だと！？警備システムは一体何を…。否、、コルタナ、熱感知システム作動。」

「了解。」
「鳳鈴音、お前は退け。どの道、ＥＮもほとんど残っていないだろう。俺が相手をする。」
「何でよ！私だっ「戦いを知らない素人が、粋がるな。」なっ…！！！」
「邪魔だ。」
「一夏、生命反応無し！無人機よ！！」
敵の攻撃をヒラリ、ヒラリとかわしていく最中に考える。
無人機なんて、まだ、どこの企業・国も開発に成功してないはずだ。ましてや、ＩＳなんて…。第一の前提として、女性が乗っていて初めて、動く代物のはず。だとしたら、一体誰が？…、居るじゃないか、世界に一人。ＩＳ開発者たる篠之乃束が。
「そういうことか。ならば、遠慮は要らないな。消えろ、イレギュラー！！」
犯人の目星が付いたら、一気に攻撃を開始した。細かく動き、スライプナーの銃身から雨のようにビームが、無人機に降り注ぐ。反撃の隙すら与えずに、攻撃を続けた。
「霞君！鳳さん！今、アリーナのシールドを3年の精鋭がクラッキング中です！！増援まで、持ち堪えてください！！」
シールド？あぁ、そういえば、降りていたな。しかも、最高レベルで。まぁ、期待はしていない。なんせ、相手はあの篠之乃束だ。期待する、というのも酷な話だろう。本人達が、知る由も無い話だが。
「山田先生が言ってくるまで、忘れてたでしょ。」
「そうだが、何か？期待してない。」
「全く…。それよりも、コアは傷付けないでね。後で調べるだろうから。」
「分かっているさ。残りＥＮ１１７、か。少々、はしゃぎ過ぎたか？…、こいつを殺るには十分か。」
無人機の両腕と両足、ジュネレーターを破壊し、頭部にスライプナーを突き立て無人機は活動停止した。

「戦闘終了。システム、待機モードに移行。お疲れ様、一夏。」
「あぁ。」

霞に邪魔と言われ正直、悔しかった。だけど、あいつの戦闘を見ている限り、私がいたら逆に足枷となっているような戦いぶりだった。私のＩＳじゃあいつの速度についていけないし、それに何より、あいつの気迫見ているだけの私が圧されてた。見ているだけなのになんで、こうも圧されているのだろう？そう思ってしまった。
戦いぶりから分かるように、終始あいつのペース。最初、無人機の攻撃をかわしているだけだったけど、突然、人が変わったように攻撃し始めた。それも、反撃の隙も与えずに。ビームが、まるで雨のように無人機に降り注ぐ。
「すご…。全部、撃ち漏らしてないじゃない。なんのよ…？あれが、霞の本気なの？」
思わず、声に出してしまっていたようだ。有り得ないくらい、正確無比な射撃。鬼神の如し、怒涛の攻撃。これが霞一夏の本気ならば、私が勝てるほどの相手じゃない。ということは、霞一夏という人物は鳳鈴音に対して、かなり手加減していた、ということになる。そこまで考えて、無性に腹が立った。同時に、あいつに追いつけないとも、思ってしまった。違いすぎる。何もかも。
「負け、た。あぁもう、完敗よ。認めるわ。私じゃ、何時まで経ってもあんたに勝てる気がしないわ。だけど、何時か勝ってみせる。絶対によ！」
ピットに戻る直前あいつ、霞み一夏に向かって、私鳳鈴音は宣言した。

「負け、た。あぁもう、完敗よ。認めるわ。私じゃ、何時まで経ってもアンタに勝てる気がしないわ。だけど、何時か勝ってみせる。絶対によ！」
なんか知らんけど、勝手に宣言された。俺、なんかしたか？

ともあれ、寮に戻りコルタナと話す。因みに、クラス代表戦は中止、生徒は全員寮に帰された。
「…、どうだった？コルタナ？」
「今日のアレ、所属はおろか登録すらなされて無かったわ。」
「つまり、４６８番目のコアか。」
「そう考えるのが妥当でしょうね。」
「やはり犯人は、篠之乃束か。全く、厄介しか振り撒けんのなら、大人しくしておいて欲しいものだ。」
俺は、そのまま夕食の時間まで不貞寝した。
少年は尊敬を軽蔑変え、憎悪を募らせていく。昔の尊敬は、過去のものだと、嵐は気付かない。

第１６話　弾丸の雨ー？（後書き）

後書き
霞「うｐ主、ちゃんと投稿前に確認はしていたのか？」
そ、そのはずなんですが…。
霞「では、これは一体、どういうことなんだろうな？」
…、私のミスです。ハイ。スミマセンデシタッ！！
べ「またか？」
エ「あぁ、まただ。」
べ「懲りないな。うｐ主も。」
エ「今回は、酷いぞ？なんせ、前に投稿したやつとモブに乗せてた機体の名前を間違ってたことに今更、気付いたんだからな。」
べ「…、言葉も無いな。」
エ「全くだ。」
うぅ～、そこ、聞こえてるからねぇ～。小声で言ってるつもりなんだろうけど。
エ・べ「スマナカッタナ。」
片言で言うな！それと、謝るつもり無いでしょ！？
エ「今回ばかりは、同情する余地は無い。自業自得だ。」
べ「右に同じ。」
ちくせう。
霞「おいうｐ主、シュミュレーターに逝くぞ。モタモタするな！」
えっ！？ちょっ、いーやーだー。
ズルズル
べ「逝ったか。」
エ「今回のメニューは？」
べ「ＡＣ３系列の歴代ボスの、夢のフルコース。だったか？」
エ「管理者戦で詰むに、１００００Ｃ」
べ「では、完成型ファンタズマで詰むに、１５００００Ｃだな。」

エ「ちょっと待て。それ、ナインブレーカーもか？」
べ「そうだが、どうした？」
エ「変更だ。ナインボールで詰むに、２００００Ｃ賭ける。」
べ「そうか。私は変更無しだ。…、話題もないし、次予告に行くぞ。」
エ「後は任せた。」
べ「あぁ。次回は本編じゃなく、番外編だ。一夏がＭＡＲＺ入隊前の話だ。
漸く訓練も終わり、ハッター軍曹から、何かの格納庫に案内される一夏。そこにあったものは、旧式のワークローダーだった。これは誰のものなのだろうか？それに、ハッター軍曹からのプレゼントとは？
ここに、ＭＡＲＺ最高戦力と将来称される、コンビがたんじょうする。次回　番外編　Ａｒｔｅｒｉａｌ　お楽しみに。」

番外編　Ａｒｔｅｒｉａｌ（前書き）

アルテリア：クレイドルにとって、一番重要なエネルギー供給施設。ＯＲＣＡ旅団に主要施設を襲撃されたり、古王と首輪付きにめちゃくちゃにされたり、破壊天使と一緒に防衛したりと、何かとバトルフィールド扱いされてる重要施設。…、重要なのになんでさ？という突っ込みは、無し。

番外編　Ａｒｔｅｒｉａｌ

俺は姉と決別し、ハッターさんと一緒にＭＡＲＺ東方支部に居る。そこでＭＡＲＺに入隊する為、日夜訓練と勉強にいそしんでいる。勉強は難しいが面白く、周りの大人達に聞けば、分かりやすく教えてくれた。訓練の方はまず、体作りから始めた。何しろ、体力が物を言うところだからだ。それから、ナイフ戦や射撃訓練、ＣＱＣなどの体術を最初にみっちり教え込まれた。普段は仕事の無い人だが、たまにハッターさんが直々に教官役を買って出てくれた。この支部じゃ、そんなに珍しいことじゃないらしく、正直、仕事はどうした？と言いたくなるが。

「ＨＥＹ！一夏、今日はお前に渡したいものが、ある。付いて来い。」

「へ？く、訓練の方はどうするんですか？」

「あ゛ー、ｎｏｔｈｉｎｇ！」

今日は訓練無いのかー。なら、別に良いけど。しかし、ハッターさんの顔、なんか、悲しそうだった。大事な人を亡くした、みたいな。兎も角、なんだかよく分からないけど、ハッターさんに付いて行く。

俺はハッターさんに付いて行き、何かの格納庫の前に居た。ハッターさんがドアロックを解除し、中に入る。すると、全長１０ｍ前後のロボットが静かに佇んでいた。

「これ、は……。」

「これは、パワードスーツ「バーチャロイド」が開発される以前の、云わば原型のようなものだ。」

「何故、俺に…？」

ハッターさんが俺の肩に、手を置き言った。

「これは、シュープリスは、お前の父親が乗っていた機体だ。それに、一夏に渡すのは、一夏の父親：ベルリオーズの遺志でもある。」

「父、さんの…。」
そのときの驚愕は、計り知れない。姉とは両親のことについて、禁句の類だったし、俺自身、記憶に無い。だから、両親のことについて知っているハッターさんに驚いた。俺の頭の中はごちゃごちゃになっていて、しばらく、呆然と立ち尽くしていた。

それからハッターさんに頼んで、両親の情報を見せてもらった。どうやら、母親：霞スミカも父親：ベルリオーズと同じく、ＭＡＲＺの旧式ロボットの兵器のパイロットだったらしい。旧式といっても、実戦向けに改造・チューンされたＭＡＲＺの主力だったらしい。一部の支部では、未だ現役稼動してるものもあるとか。
父親：ベルリオーズは、テロ鎮圧戦時にＫＩＡ（戦死）認定され、母親：霞スミカはパワードスーツ「スペシネフ・罪」の起動実験中に動機の暴走により、ＫＩＡ（戦死）認定されたらしい。二人とも、子供達を本気で愛していたそうだ。だから態と、危険な自分達から引き離し、比較的平和な日本に置き去りしたらしい。
「千冬、一夏、すまない。私はお前達に何もしてやれなかった。…、父親らしいことも、家族らしいことも、何一つ、してやることが出来なかった。すまない…。許してくれ、とは言わないが、もし、叶うのであれば、この機体でお前達の道を、切り開いてくれ。…、大変身勝手ですまないが、私達はお前達を愛していた。それだけは、覚えておいてくれ。」
ここで、メッセージは途切れている。ＭＡＲＺの増援が来たときにはもう、息を引き取っていたらしい。俺は父親の遺言を聞いたとき、大声を上げて泣いた。兎に角泣いて、泣いて、泣きまくった。母親の方の遺言は、残念ながら無かったものの、最期を看取った人に聞いて分かった。
「すまなかった。」
その一言だけ言って、息を引き取ったらしい。姉も俺も、知らなかった。知りえなかった、事実。両親は、俺達に平和の中で生きてい

て欲しかったらしい。でも俺は、それでも俺は、ＭＡＲＺに入った。もう、無関係じゃいられなくなったし、初めて俺が入りたいと思ったからだ。…、両親が存命ならば、喧嘩になること間違え無しだが。ハッターさんにそのことを伝え、より一層厳しい訓練付けの日々だった。何度、死にそうになったか分からない。でも、それでもくじけずにひたすら、訓練に励んでいた。ただ、訓練用のアファームド・ストライカーで生身のハッターさんにボコボコにされ続けるのは、流石に心がぽっきり折れたけど。ハッターさん、ＩＳの装備を生身で扱えるとか、卑怯だろ。マジでチートです。本当に有難うございました。

「一夏、これで訓練課程は全部修了だ。Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ！」

「…、ハァー、フゥー、ハァー、フゥー。ま、マジっすか…。お、終わったぞー。」

パタリ

この数年のことを考えてもやはり、訓練漬けの毎日しか思い出せない。後、大検取る為の勉強。…、スパルタですな。しかし、あの頃と比べて格段に強くなったのは、手に取るように分かる。並みのＭＡＲＺの隊員なら、瞬殺出来るくらい。因みに、ハッターさんの訓練生時代の頃は母に教えを受けていたらしい。当時、母のことを「鬼教官」と呼び、恐れられていたらしい。何でも、かなりキツイ訓練内容だったとか。

「スパルタほど、伸びのいい訓練方法は無い。」

と言わしめたことがあるとか、無いとか。…、それで死に掛けたら元も子もない、と思うのは俺だけ？

兎も角、ハッターさんと一騎打ちで疲れた。さっさと部屋戻って寝よ。

翌日、朝食を取って、ＭＡＲＺの制服に着替えてから、ハッター大

佐の執務室に向かう。昨日までと呼び方が違うのは、今日からＭＡＲＺ東方支部に正式着任するからだ。大佐なのに何故、執務室？と思うかもしれないが、実はハッター大佐、ここの支部長である。ただし、当局からまだ正式な辞令が届いておらず、支部長（仮）みたいなことになっているのは、まぁ、ご愛嬌ってことで。新人の俺のほうにはすんなり降りたって言うのに、なんとも可笑しな話だ。

コンコン

「霞一夏二等兵です。」

「ＯＫ．Ｃｏｍｅ ｈｅｒｅ．」

ギィーーー、バタン、カツカツ。

「霞一夏二等兵、本日付けで第１３機動遊撃部隊に着任になります。」

「了解した。ようこそ、東方支部へ。っと、建前はこのくらいにして。一夏、入隊祝いのプレゼントだ。」

「…、ネックレス？つか、何この基盤？クリスタルの中に入ってるみたいだけど。」

「貴方が霞一夏ね。データより、男前じゃない。」

「う、うわっ！？ネ、ネックレスが喋ったぁ！！？？」

慌ててネックレスを落としそうになったが、寸でのところでチェーンを掴んだ。そりゃ、ネックレスから声がすれば、誰でもビビるわいっ！！

「おいおい、あまり一夏をからかうな。」

「ごめんなさい。悪気はなかったの。」

クリスタルから映像が投影されて、長身痩躯の女性が現れた。俺は思わず、凝視してしまった。というかそもそも、このクリスタル、Ｖクリスタルだったのね。なら、これも納得せざるを得ないよな。うん。

「私は、コルタナよ。施設管理用ＡＩのプロトタイプ。よろしくね。」

「知ってると思うけど、俺が霞一夏だ。ＭＡＲＺに入隊したての新

入りだが、よろしく頼む。」

少年は、唯一無二のパートナーに出会い、成長していく。ここに、ＭＡＲＺ最高戦力の一人がいたのだった。

番外編　Ａｒｔｅｒｉａｌ（後書き）

後書き

お前自分だけカスタムパーツとか、卑怯だぞ！正々堂々戦えや！！

コラ！！

べ「ん？何か、聞こえたか？」

エ「気のせいだろう。それにしても、これはなんだ？」

べ「うｐ主の書置きだな。読むぞ。」

べ「皆さんに質問です。ＡＲＭＯＲＥＤ　ＣＯＲＥ　ＰＲＯＪＥＣＴ　ＰＨＡＮＴＡＳＭＡ　というものをご存知でしょうか？番外編は、それを中心に進めていきたいと考えているのですが、どうでしょうか？」

エ「これ、ＡＣシリーズでも２番目に古い奴だろう？知っている人が居るなら、希少種物だな。」

べ「何しろ、ＰＳ時代のものだからな。知らない人の方が、多いだろうな。ＮＥＸＵＳやっていた人なら、知っているかもしれんが。」

エ「あぁ、過去ディスクか。再現するなら、最期まで手を抜かないで欲しかった。」

べ「とあるミッションじゃ、夜中にやるようなものじゃないのもあったらしいな。主に、声的な意味で。」

エ「…、あの声は、私でも怖い。」

べ「兎も角、エヴァンジェ、次予告。」

エ「分かっている。次回、また転校生がやってくる。しかも、同時に二人。一人は、一夏と同じ、男性適格者。もう一人は、軍人。しかし一夏は、男性適格者に対して疑念を抱く。次回　第１７話　激震！！　二人目…　お楽しみに。」

第１７話　激震！二人目…（前書き）

ちょっ、何時の間にやらアクセス件数７００００超えてたー。有難うございます。感激の至りです。と、いうわけで、新作投下。

第17話　激震！二人目…

「皆さん！今日は、転校生が二人来ます。それでは、入ってきて下さい。」
ざわざわと、騒がしくなる教室。いくらなんでも、一人くらい、三組に行かしてやれよ。明らかに、戦力過多だろうが。これで専用機持ちとか来たら、笑えねぇ。…、って
「は？」
間抜けな声出したの、俺です。な、なんでラウラがいるんだよ！？アイツ、ドイツ軍でＩＳ部隊の隊長やってるとか、ぬかしてなかったか！？い、否、他人の空似だ。空似。
「では、自己紹介をどうぞ。」
「はい。僕は、シャルル・デュノアと言います。一人目がこちらにいらっしゃるということなので、僕もこちらに来ました。至らぬ点もあると思いますが、よろしくお願いします。」
…、一瞬の静寂。えっと、耳栓。耳栓。っと、まさか、これを使う日が来ようとは。…、思っちゃいたけど。この学園に居る以上。つか、デュノアってさ確か、「シャルロット」っつー女の子のみじゃなかったか？あれ？違った？
「（コルタナ、デュノア社に俺のＩＳデータ、渡してなかったか？）」
「（えぇ、そのはずだけど。…、調べてみる？）」
「（あぁ、頼む。）」
コルタナに情報を調べてもらってる間にも、自己紹介は進行中。いい加減、耳栓取るべきだな。この耳栓、実はワイヤレスイヤホンで、ＭＡＲＺの変態技術者共が作ったにしては、割とまともな商品の一つ。ネット販売とかも、してたり。こういうことに、何故、全力を注がないのかが激しく気になる。
「次の方、どうぞ。」

「了解。ラウラ・ボーデヴィッヒだ。」
「そ、それだけ…？」
「以上です。」
そして、俺の所に一直線に来る訳か。あー、これが現実かぁ。認められるか！！こんなこと！！と思いつつ、諦めの境地に。運命を受け容れろって、ことですね。分かりたくありません、アマジーク先生。…、アマジークって誰？
「久しぶりだな、霞少尉。」
「本当ですね、ボーデヴィッヒ少佐。」
「？彼女はどうしたんだ？」
「あぁ、情報収集に行ってもらっている。それと、フランクに行こうぜ？ここでは、階級も関係無いし。」
「それも、そうだな。それでは。」

とまぁ、こんな感じで朝のＳＨＲが終了し、さっさと授業に向かう。一時間目から外でＩＳの授業とか、マジ勘弁して欲しい。寒い。でも、織斑先生。遅れたら、出席簿で叩かれること間違い無しだ。なんとしてでも、回避しなくては。
「おい、デュノア。全力疾走の準備は万全か？」
「ふぇ？」
「まぁ、出来ていないなら、決して授業に遅れないように、ゆっくり来い。生憎、俺は先に行く。」
「えっ！？ちょっ！！」
教室を出て、全力疾走。本来なら罰則ものだが、後ろの軍勢を見れば文句のいいようがないだろう。だって、全員目が血走ってる。あんな奴らに、俺は捕まりたくない。絶対に。
「っち、数の多い。仕方ないか。」
数が予想以上に多く、振り切れそうに無い。アリーナの更衣室まで、まだ距離があるが、仕方ないので窓を開け放ち、飛び降りる。織斑先生の出席簿アタック＜＜＜越えられない壁＜＜＜校則、なんだ。

気にしていられるか。アレだけは、いくら俺でも受けたくない。それなら、キック・ザ・ドラマティックを受けた方が、まだマシだ。多分。地面とキスする予定は無いので、地面に着く前に、ＩＳをスラスターとＰＩＣだけ展開してアリーナの更衣室へ。

「ふぅ、これからも続くとなると、先が思いやられるな。」
「一夏、シャルル・デュノアという人間は、この世界にいないわ。いるのは、シャルロット・デュノアだけ。偽造されてたわ。相当高度にね。」
「捨て駒扱い、という訳か。目的は、テムジン７０７Ｊのデータか、或いはＭＡＲＺの保有する技術全てか。」
「あわよくば両方、とかね。」
「過ぎたるは及ばざるが如し。抜かったな。ありがとうな、コルタナ。ついでに、このことを一応、当局に報告してくれ。」
「どういたしまして。分かったわ。それより、時間よ？」
「おっと。」
コルタナと話しつつＩＳスーツに着替えていたら、いつの間にか時間になっていた。
俺のＩＳスーツは勿論、ＭＡＲＺ製で青地に黄色のラインと赤のワンポイント、それにＭＡＲＺのロゴが入ったタンクトップ、青地に白のラインが入ったスパッツである。パワードスーツを着込む際のアンダーウェアと同じ素材で出来ており、真来世が高い一品。耐熱、耐寒、耐Ｇ、吸湿性に優れていてＭＡＲＺの正式採用となったものだ。

「じゃあ、行こうか。」
Ｖクリスタルのネックレスを着けて、待機状態のＩＳを持って、いざグラウンドへ。既に何人かの生徒が来ていたらしく、雑談してたようだ。しかし、寒そうな格好だよな。海でもないのに水着みたいに露出度高いスーツでさ。寒く、ないのだろうか？そこが一番、気

になる。っと、漸く全員集まったらしく、織斑先生も来た事で早速授業開、って、あれ？
「…！！ど……い！！どいて下さーい！！！」
ＩＳが墜落、じゃなかった。ＩＳを纏った山田先生が、地面に向かって突撃してんだな。助けるべきか、助けざるべきか。ＰＩＣや絶対防御があるから、これくらいのことでは怪我はしない筈だが…。
つか、本当に教師か？この人？…、誰かフォローしてやる、という心優しい人はおらんかや？
少年は、再会した。少女達はまだ、少年の心に気付かない。

第１７話　激震！二人目…（後書き）

後書き
思ったんだけどさ。
べ「どうした？うｐ主？」
スティンガーって、ＡＣＰＰの主人公に勝ってたら、どうするのかなーってさ。
エ「どうするって、何を？」
だって、ファンタズマって肢体を切断して乗り込むんだぜ？絶対、特攻兵器か何かの親戚だろＪＫ、と思ったんだよね～。
霞「確かに、資料にはそう書いてあるな。どうする気だったんだ？」
さぁ？そこが分かんないから、フロム脳の出番なんでしょーが。
べ「…、アレサ。」
エ「浮気か？」
霞「プロトタイプネクスト。確かに、似ているな。ファンタズマに。」
だよね～。似たようなものだしね。どっちも。
まぁ、いずれにせよ、まともな最期じゃなかった世よね。中の人。
べ「あぁ。」
エ「すまない。話が見えん。」
あぁ、いいよ。気にしないで。それよりも！あと、１２日で発売だよ！？いやー、楽しみだねぇ～。
べ「ＡＣｆａでのエンブレムのいくつか、使えるみたいだしな。」
霞「大方、月光の入手までは手段を選ぶつもりも、無いのだろう？」
勿論。ついでにあるのであれば、カラサワのほうも。なんだかんだいって、結構強いからね。…、当たれば。
エ「うｐ主の技量だと、レギュを相当充実してからでなくては、当てるのも無理そうだが…。」
…、ネ、ネクスト並みの機動力じゃなければ、或いは。

霞「違うだろう。自分がネクスト並みの機動力かつ、相手がノーマルほどの機動力。だろう？」
お、仰る通りでございます。…、どうせ粗製だもん。
霞「あー、煩いから、次予告行くぞ。次回、鈴音とセシリアにラウラとの関係を聞かれる、一夏。何やら、波乱の予感じゃないか。いや、修羅場か？まぁ、いい。どの道、一夏は気付かんだろうからな。それと、やっぱり、一夏を簡単には休ませてくれないらしい。こんなことだらけだな。いい加減、慣れてきた頃だろう。次回　第１８話　激烈！　大人の…　お楽しみに。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8629y/

IS~一夏の叛抗～

2012年1月14日21時54分発行